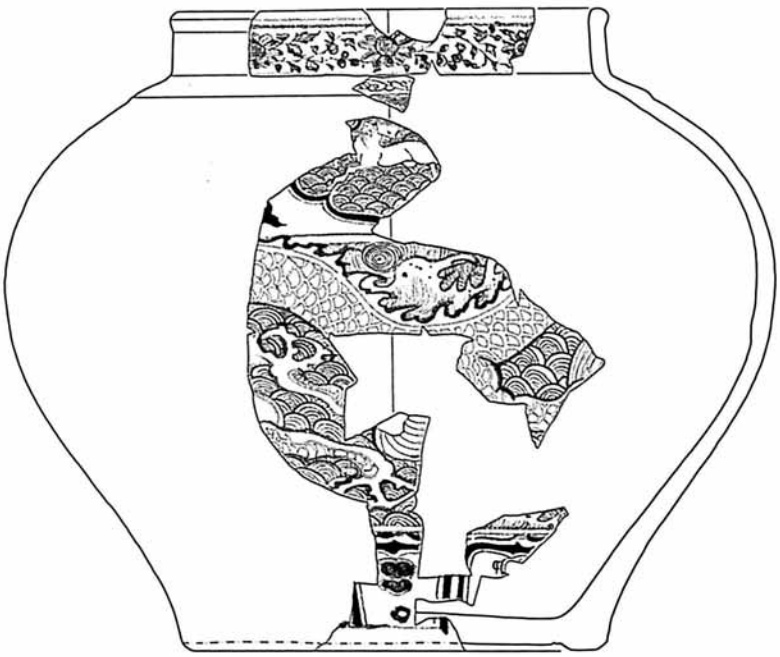
今帰仁村文化財調査報告第14集

今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ



1991

沖縄県今帰仁（なきじん）村教育委員会

今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ

－主郭（俗称本丸）の調査－

１９９１

今帰仁（なきじん）村教育委員会

巻頭図版. 1　今帰仁城跡空撮

巻頭図版. 2　主郭（俗称本丸）発掘調査状況

巻頭図版. 3　調査区全景（南から北）

巻頭図版. 4　翼廊付基壇建物跡（第Ⅱ期）

巻頭図版．5　土留め石積みと掘立柱跡（第Ⅰ期）

巻頭図版．6　土留め石積みと版築造成層（第Ⅰ期）

巻頭図版. 7　主郭（俗称本丸）出土の主な遺物

序

本報告書は、史跡今帰仁城跡の保存修理事業に伴う発掘調査の成果をまとめたものであります。

今帰仁城跡は1972年5月15日「日本復帰」によって、国指定の史跡に指定を受け、その後1977・78年に史跡に関する「保存管理計画策定書」を作成、事業は「今帰仁城跡保存修理事業」としてスタート、現在事業を推進しているところであります。

これまでに「志慶真門郭」の発掘調査及び遺構整備を完了、引き続き主郭（俗称本丸）の発掘調査を実施、終了後に建物遺構の整備や石垣修理などをおこなっています。

本報告書は、第4・6・7・8次調査として実施したものを中心にまとめたものであります。調査の結果、遺構は第Ⅰ期から第Ⅳ期に区分され、主郭の地が使用され始めるのは13世紀末頃であることが確認されています。

発掘調査によって、掘立柱の建物跡、柵列跡、基壇建物跡、礎石を伴う建物跡の諸遺構が検出、その性格が明らかにされたことは主郭の変遷を知る上で極めて重要なものであります。各時期の遺構が解明され、今後の調査を進めていく上で、一つの指標を与えうる大きな成果といえます。今後の計画としては、主郭周辺の調査及び石垣の外側周辺も含めた調査が考えられます。これまでに調査、整備した志慶真門郭を含め、主郭の遺構を整備し、その保存と活用をはかることもまた、重要な責務であります。

この報告書が今後に計画、実施される今帰仁城跡の調査、研究及び保存整備とその活用をはかる上で参考資料になれば幸いであります。

おわりに、本報告書を作成するにあたって、文化庁、奈良国立文化財研究所、沖縄県教育委員会文化課、今帰仁城跡調査研究整備委員会及び発掘作業、資料整理作業にご協力を賜わっております関係各位に対し記して感謝を申し上げます。

1991年3月

沖縄県今帰仁村教育委員会
教育長　西　島　一　將

例　言

1．本報告は、今帰仁村教育委員会が、国（80%）・県（10%）の補助を受けて、1982（昭和57）～1985（昭和60）年度に実施した、「史跡今帰仁城跡保存修理事業」における発掘調査の成果を主に収録したものである。

2．発掘調査、写真測量、資料整理等でつぎの方々の御指導、御協力を得た。また、金子浩昌、西中川駿、黒住耐二氏から玉稿をいただいた。記して謝意を表する。

発掘調査及び遺構整備指導

狩野久（飛鳥藤原宮跡発掘調査部長）、佐原真（奈良国立文化財研究所）
安原啓示（同）

写真測量及び測量指導

松本修自（奈良国立文化財研究所）、木全敬蔵（同）、西村康（同）、伊東太作（同）
岩本正二（同）、松井章（同）、光谷拓実（同）、山中敏史（同）

土層転写

沢田正昭（奈良国立文化財研究所）、肥塚隆保（同）

獣魚骨・貝類同定

金子浩昌（早稲田大学講師）、黒住耐二（千葉県立中央博物館）

釣針のX線写真

渡辺誠（名古屋大学教授）

フィッショントラック

鈴木正男（立教大学教授）

石材同定

大城逸朗（県立博物館学芸員）

遺物同定

矢部良明（東京国立博物館東洋陶磁室室長）、長谷部楽爾（東京国立博物館）
楢崎彰一（名古屋大学教授）、脇田晴子（鳴門教育大学教授）
小野正敏（国立歴史民俗博物館）

3．本報告書の執筆・分類・編集は金武、宮里、松田があたった。

4．資料整理は下記のメンバーで行った。
新城恵子、上間恵子、与那啓恵、神谷朝子、玉城成子、仲村美代子、新城由起子
山里豊子、宮里末廣、仲村渠智、仲宗根百合子

5．発掘調査に関わった作業員は下記の通りである
稲福トミ、稲福勝、稲福正次、玉城静枝、玉城苗子、金城キク、金城マツ、金城兼正
金城光吉、金城勝、金城政子、金城政仁、金城妙子、古波蔵喜美子、松田シズ
松田亀吉、城間格、城間喜精、城間吉格、城間宏子、新原房子、新城トミ、新城マツ
新城悟、新城秀樹、新城春子、新城邦也、大城芳子、大城菊松、仲村渠安行
仲尾次正勝、仲本義人

6．出土遺物は連番を付し写真の番号と一致するようにした。紙面の都合上一部写真掲載を省くものがある。

本文目次

第Ⅰ章　序　　言

第１節　調査に至る経緯……1
第２節　保存と整備……1～3
第３節　調査、整備のための委員会……4
第４節　調査体制……4

第Ⅱ章　調査概要

第１節　調査地域……5
第２節　調査経過……6～12

第Ⅲ章　遺　　跡

第１節　遺跡の位置と歴史環境……13～15
第２節　層　序……16～19
第３節　遺　構……20～50

第Ⅳ章　人工遺物

第１節　陶磁器……51～260
第２節　瓦……261～263
第３節　玉……264～267
第４節　煙　管……268
第５節　遊　具……269～271
第６節　銭　貨……272～299
第７節　金属製品……300～311
第８節　石　器……312～327
第９節　貝製品……328～333
第10節　骨製品……334～339

第Ⅴ章　自然遺物

第１節　貝類遺存体……340～360
第２節　今帰仁城跡出土の脊椎動物遺骸……361～401
第３節　今帰仁城跡出土のウシおよびウマの骨の計測値の比較……402～404

第Ⅵ章　総　　括……405～408

第Ⅰ章　序　　言

主郭（俗称本丸）の調査は1982年の志慶真門郭の発掘調査の終了と同時に南側の一部を着手（表土層の発掘）し、継続して行った。主郭は東側の「志慶真門郭」・北側の「御内原」・西側の「大庭」に取り囲まれ、城内では最も高いところに位置（標高105ｍ）している。

本報告では、第４次調査から第８次調査で検出された遺構、遺物について主に収録したもので、その内の第５次調査（大隅郭）については別の機会に報告を行う予定である。

第１節　調査に至る経緯

城跡は1955年１月25日に名勝、1962年６月７日に建造物として「琉球政府」に指定（現在は県指定の名勝・建造物）され、1972年の日本本土復帰によって国の史跡指定を受ける。現在は環境整備事業を実施している。

1977・78年にかけて今帰仁城跡環境整備事業についての「保存管理計画策定」を作成し、これを受けて1980年から第１次５ヶ年計画をたて、15年を目標にスタートした。1980年からは志慶真門郭の調査を開始、その結果、石垣遺構、建物遺構と多くの出土遺物が得られた。時期は14～16世紀にかけて使用された郭であることが判明した。

主郭の調査は、グスクの中心がどういう機能を果たしていたかを解明すべくすすめていった。1982年に一部を開始し、順次続行して1985年には終了した。調査をすすめていく中で、予想もし得ない層序及び遺構の検出で複雑を極めた。その結果、主郭での各時期による文化層及び遺構、そして各時期に於ての広場が把握された。複雑な遺構の検出や調査の延長等で事業計画に変更が生じている。

城跡の保存修理事業は、発掘調査、遺構整備、石垣修理、石垣写真測量及び図化作業等を現在も継続している。

第２節　保存と整備

今帰仁城跡の史跡指定面積は1979年の追加指定により79,272.35㎡である。1974・75年には国、県からの補助事業で土地の公有化がはかられている。非公有地としては城跡内の主要部分である字今泊区の字有地と城門周辺の民家を残す以外は土地買い上げをほぼ終了している。この間、緊急を要する土地に関しては村独自予算でもって４筆、300㎡の買上げを行っている。指定地の管理については、これまで字今泊区が管理していたのを字今泊区と村及び県により協議を重ねた結果、1979年に字今泊区から村管理に対する移行の同意が得られ、今帰仁村教育委員会は文化庁の管理団体の指定を受け現在に至っている。

主郭（俗称本丸）の整備事業は1986年から着手し1990年にはほぼ終了した。以下、事業について工事概要を中心に概述してみたい。1986年は発掘調査後の埋め戻し工事、1987年は「火の神祠」の移設工事、1988年は基壇周辺工事、1989年は版築遺構表示工事、1990年は階段・石垣修復工事等を終えている。1986年の埋め戻し工事は、発掘調査で掘られた主郭地内の全面積である。土を転圧機でもって何回も転圧を加えながら埋め戻しを実施した。1987年は「火の神祠」の移設工事及び貼り芝工事である。「火の神祠」は発掘調査時に実測、解体し一時現場保管していた材料をそのままに使い復元するもので、同前庭部に設置されていた石灯籠一式、また、乾隆14年（1749年）銘の石碑、「山北今帰仁城跡監守来歴碑」及び同台座等の移設工事と同時に貼り芝工事を実施した。「火の神祠」建物は発掘で検出された階段の正面で、地下の遺構に影響を与えない場所を選定して位置を決め工事を実施した。

1988年は基壇整備、西側の石垣修復工事、第Ⅲ・Ⅳ期の礎石建物跡の遺構表示工事である。第Ⅱ期の基壇整備は、次のように実施した。基壇本体及び翼廊の崩れ部分については、同様の石材を用いて修復した。基壇本体部の高さは現存していた縁石を最高所（北西隅寄り）とし、全体的に一石ほど嵩上げをした。また、基壇下の礎石はそのままにし、上部の削平された面についても基壇下の礎石同様に礎石が配されていたものと推定され、その部分については石の配置を避けて、壁間仕切りの表示をする程度にした。仕切の部材は通称、本部石灰岩と呼ばれるもので、方柱状に加工をして壁の回線標程度にした。また、上面部は高麗芝を貼り、基壇下の礎石周辺は砕石で敷き均した。

西側の石垣修復工事は、西壁ラインの南側（階段寄り）の規存石積みを最高水準にして高さを決め、北側では北壁に擦り付ける方法で実施した。

第Ⅲ期の礎石建物は発掘調査以前に、植栽作業等により礎石の移動や抜き取りがなされていて、現存するのは僅かであった。発掘調査の結果、桁行５間×梁間４間の建物であることが確認されたが、調査で検出された状態のままに保存を図っている。

第Ⅳ期については、１棟建てか２棟建てにするかで議論が集中するところであった。柱まわりの東ライン北側寄りに２間×５間の１棟と南寄りの６間×５間の１棟、計２棟建ての方針と桁行９間×梁間５間の１棟建てのいずれを採用するかについては時間を要した。図面資料から「火の神祠」が建てられた場所の礎石の無い空白部分が討議され、桁行９間、梁間５間では空白部のスペース西側ラインのところでやや開きぎみとなり軸線が合致しないことにより、２間×５間の１棟と６間×５間の１棟を考えるのが妥当ではないかと判断された。同様の類例遺構が無いこともあって、２棟建てについての決定的な判断を下すには、いくつかの不確定の要素を若干含んでのことであったが、他の類例の参考資料を持たないままに、整備を実施した。整備の手法としては礎石と礎石の間を赤レンガで繋ぎ、壁間仕切として表示し四方を界線で囲んだ。また、同建物内（南側）に掘られた直径約1.30ｍ深さ約1.5ｍの円形留井戸状の遺構は土で埋め戻して、その直上面で円形状に同種の石を配列し遺構表示とした。

第Ⅰ期の建物遺構は基壇内の試掘調査により確認された。調査は基壇内で行い、東西南北にトレンチを設定し掘り下げた。その結果、基壇本体の中の構造は土や石を固めたりす

るものではなく、小さな角礫を詰めるだけのものであることが確認された。建物跡は確認されているが、その規模については現在のところ不明である。建物南側に幅約１m、長さ約９mの石敷きの遺構を伴い、建物外周（西、北、東）にコの字状の棚を廻らすものであることも分かった。なお、整備の手法としては、上面に第Ⅱ期の基壇建物跡が整備されることで、周囲の柵列だけを整備することにした。柵列の柱を表示するものとして、その材をリュウキュウツゲの低木に選定、植栽による整備とした。

以上のように主郭の整備については、同一面に遺構の重なりがあって各々を表示するには無理があり、第Ⅱ期と第Ⅳ期の遺構を主として整備を終了した。

ＰＬ.１　整備の完了した主郭（南から北）

第３節　調査、整備のための委員会

1981年に調査研究整備委員会を発足させ、年１回の委員会を開催している。委員は次のとおりである。なお、事業全体については牛川喜幸・中野浩・安原啓示（文化庁）、金武正紀・當眞嗣一・安里嗣淳・上原静・玉城朝健・糸数兼治・松川章（県文化課）の各氏から御指導を得た。

委員長	坪井清足（奈良国立文化財研究所所長）
副委員長	松田幸福（今帰仁村長）
	上間博安（今帰仁村長）
委員	三好勝彦（海洋博覧会記念公園管理財団理事長）
	勝浦康之（海洋博覧会記念公園管理財団理事長）
	親泊元高（美里工業高校）
	赤嶺和雄（設計同人ＧＡＮ）
	安原啓示（奈良国立文化財研究所）
	田中哲雄（奈良国立文化財研究所）
	島尻勝太郎（沖縄大学教授）
	名嘉正八郎（沖縄県立図書館）
	村上仁賢（日本キリスト教団兼次教会）
	岸谷孝一（東京大学工学部教授）

第４節　調査体制

第４次から第８次までの調査関係者は、次のとおりである。

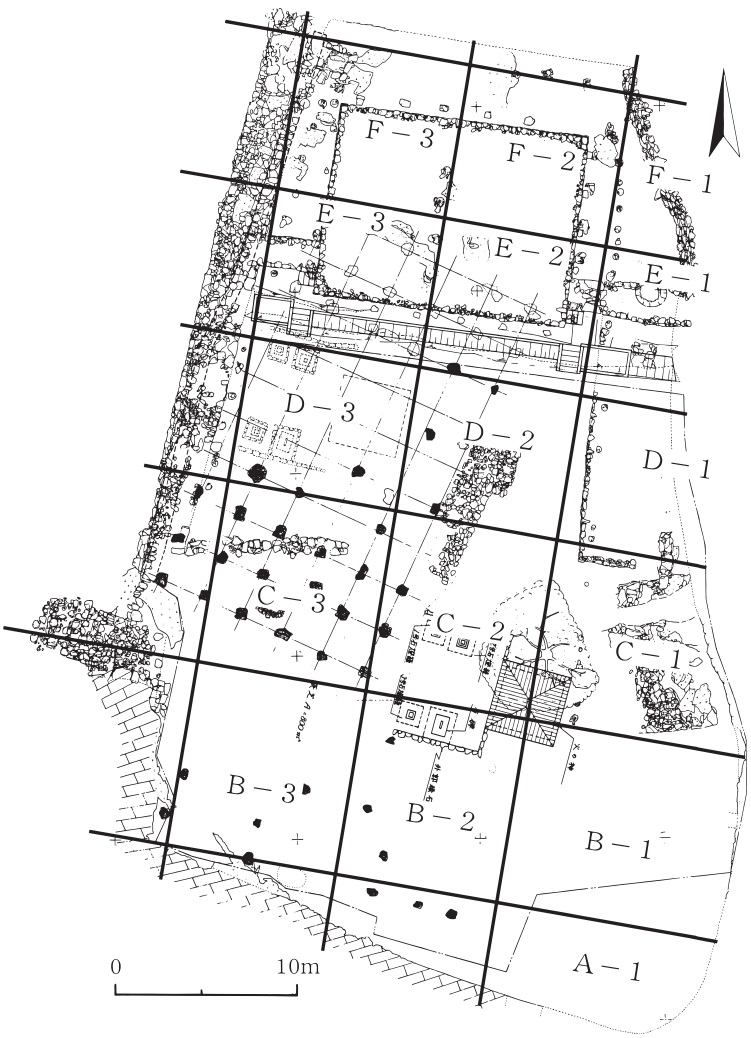
調査責任者	大城勝三（今帰仁村教育委員会教育長）
	西島一將（今帰仁村教育委員会教育長）
調査員	金武正紀（沖縄県教育庁文化課）（４～８次）
〃	上原静（沖縄県教育庁文化課）
〃	當眞嗣一（沖縄県教育庁文化課）
〃	安里嗣淳（沖縄県教育庁文化課）
〃	玉城朝健（沖縄県教育庁文化課）
〃	松川章（沖縄県教育庁文化課）
〃	松田朝雄（今帰仁村教育委員会）（４～８次）
調査補助員	宮里末廣（今帰仁村教育委員会臨時職員）（４～８次）
〃	仲村渠智（今帰仁村教育委員会臨時職員）（４～８次）

第Ⅱ章　調査概要

第１節　調査地域

主郭（俗称本丸）の発掘調査は1980年より開始した「志慶真門郭」に引き続き、1982年10月から継続して作業を進めた。主郭は城内でも最も高いところに位置し、周囲の見通しのよいところである。一帯は建物跡の遺構を示す大きな礎石が露頭していて、以前から確認がなされているところであった。村教育委員会が管理する以前までは字今泊区が直接管理を行っていた経緯があって、主郭内においても人工的に桜の木が植えられていたところである。このようなことですでに礎石の一部は動かされたり、抜き取られたりしている状況であった。調査は志慶真門郭との関連も含めて、主郭内がどのような機能をもっていたのかを主な調査目的として作業を開始した。

調査面積は約880㎡で、区域を南から北へA・B・Cとし、東から1・2・3として、A－1区・B－1区と称して作業を行った。1985年の第８次調査をもって主郭全体の調査はほぼ終了した。



第１図　調査地区位置図

第２節　調査経過

第４次調査（1982年10月29日～1982年12月18日）

志慶真門郭の発掘作業を10月28日で終わり、29日より主郭の発掘調査をはじめた。発掘調査区域の面積は約880㎡である。調査区は既設トラバー点Ｔ－10とＴ－11を結び、水平角1°46′20″西へ振ったものを基線とし、１区画を東西９ｍ×南北10ｍとした。基点を南東隅の交点に求め、この点から南北にアルファベットのＡ・Ｂ・Ｃ・・の記号を付し、東西に１・２・３・・のように算用数字を用いた。発掘区の名称は両辺の交点から南東隅の交点杭で指示することにした。また調査はＡ－２区、Ａ－３区、Ａ－１区の順ですすめた。

発掘前に区域内の草刈り作業を実施した。この結果、表土層直上に据えられた礎石がより明瞭に現れた。この礎石は発掘調査以前より既に確認されているもので、1979年に今帰仁村文化財保存調査委員によって測量調査がなされ、建物プランが確認されている[註1]。建物跡の礎石は人為的な植生により、いくつか移動したりしているが、建物の大きさは１間幅約2.4ｍ、桁行８間、梁間５間の大きなものであることが確認されている。

註文献

1. 今帰仁村教育委員会1979年『今帰仁城跡』国指定史跡保存管理計画書

ＰＬ.２　発掘調査前（南から北）

発掘作業はＡ－２区から着手、第Ⅰ層０～5cm、５～10cm として、5cm 単位の掘り下げで行った。Ａ－２区東側半分第Ⅱ層５～10cm を掘り下げたところで岩盤に達し、青磁・白磁・明青花などの中国陶磁が多量に得られた。南側石垣沿いの落石を除去、礎石（第Ⅲ期）が検出された。併行して、志慶真門郭第３区の遺構実測作業を実施する。Ａ－３区でも礎石跡が検出されるが礎石は抜き取られ、根固め用の小礫が残っているのが確認された。引き続き南側石垣沿い第Ⅱ層５～10cm で焼土と礎石を検出するが建物プランは未だ把握し得ない。白磁皿・黒釉陶器・鉄製品・銅製品が得られた。

ＰＬ.３　発掘調査状況（南から北）

主郭東南隅の弧墨状の石積み「物見台」へ上がる石段（6 段）を検出、石段中央部は漆喰で修理されているのが確認された。Ａ－１区第Ⅰ層で多量の中国陶磁とタイ陶磁、瓦質土器等が得られた。第Ⅱ層 10 ～ 15cm 面で第４次の発掘作業を切り上げ、後は実測作業を終えた志慶真門郭の埋戻し作業及び出土遺物の水洗作業を行った。

第５次調査（1983 年 10 月５日～ 29 日）

大隅と呼ばれる郭は平郎門を入ってすぐ左側の石垣で囲まれた地区である。岩山状の丘陵部と平坦部からなり、草木が繁茂、平坦地は人為的に桜の木が植えられている。伝承によれば「城兵達の武闘訓練の場」であったと言われている。発掘作業は入口奥側に調査区を設定し進めた。調査は短期であったが、中国陶磁を主として多量の遺物が得られた。しかし、遺構の検出までには至らなかった。詳細については、機会を改めて行う予定である。

第６次調査（1983 年 10 月 31 日～ 1984 年２月 29 日）

第４次調査で排出された土の運搬作業に取りかかり、Ｂ－２区、Ｃ－３区から作業を着手した。Ａ地区同様に多量の中国陶磁に混じって、鉄製品、銅製品、古銭、玉類等が得られ、出土遺物もバラエティーに富む。Ｂ－２区で石敷遺構が検出。Ｃ、Ｄ、Ｅ地区第Ⅰ層を掘り下げたところで中国陶磁が多量に出土、Ｄ、Ｅ地区でＬ状の石列遺構が検出された。

Ｄ－２地区で小型の白磁皿、杯が集中して出土、Ｃ－３地区で円形状組石の遺構が検出される。12 月１日、志慶真門郭東側石垣（内面）の修理を着手。12 月３日Ｄ－３、Ｅ－３区西側で除石により石垣が検出、Ｄ、Ｅ地区第Ⅱ層５～ 10cm レベルで縦 10.3 ｍ×横 13.8 ｍの長方形状の石列遺構（基壇天端）が検出される。

12月5日、第4次調査で着手していたA－1区を第Ⅱ層10～15cmレベルで再開する。A－3第Ⅱ層10～15cmの土の水洗作業で炭化した米、麦を、B－1第Ⅱ層5～10cmでガラスの小玉等を確認する。南側A地区の礎石建物は桁行5間、梁間4間の建物であることが明らかになる。12月20日、B－3地区第1号土坑（高さ約1m、直径約1.2m）を検出、B－1第2号土坑より青磁碗（6個）、皿（1個）がまとまって伏せた状態で検出された。本発掘での完形品の出土例ははじめてである。1月10日、B－2・C－2区の雨落ち面と考えられる敷石遺構を残して更に掘り下げる。同区第Ⅱ層10～20cmレベルで黄褐色の土と角礫を交互に敷いた地均し面が現れる。この面で多くのピットが検出されるが建物プランは不明であった。1月13日、C－3第Ⅱ層・C－1第Ⅳ～Ⅴ層の発掘をすすめ、第3号土坑の写真撮影を終える。1月20～30日、D－2・3・E－2区の第Ⅱ層10～20cmレベルの調査をすすめる。その結果、長方形状の石列遺構南辺の天端中央付近は攪乱を受け、崩れが認められた。雨対策用のテントを張り、D－3区第4号土坑の発掘を継続、E－2区石列東北隅を掘り下げ、更に北辺に拡張。この時点で石列は下方から積み上げがなされていることと、基壇の天端輪郭として把えられた。D－3区石垣沿い第Ⅱ層下5cmほどで黄褐色土の地均し層、その直下に厚さ20cmの角礫層、更に黄褐色土、角礫が交互に敷かれる地形（業）造成層であることが確認される。1月31日、D－3第Ⅶ層以下の発掘、南西隅の1.2m×4mのグリッドを第Ⅸ層まで掘り下げる。第Ⅸ層は貝塚を形成、貝はアラスジケマンガイが多く炭化物を含む。遺物は白磁口禿皿、青磁口折皿が得られた。E－3区基壇西側第Ⅱ層5～10cmレベルで白磁碗がめだって出土。2月6～9日、第Ⅷ層（版築層）の掘り下げ作業、基壇に伴う一辺約30cmの礎石を南辺側で3基検出、D－3区下層で土器片と白磁口禿皿が得られた。B－2第Ⅲ層40～50cmで若干の中国陶磁が得られるが青花類の出土はなく、B－1トレンチをB－2へ拡張して作業をすすめる。B－2区を最下層まで下げ、D－2区第Ⅲ～Ⅵ層まで掘り下げる。D－2区第Ⅲ～Ⅳ層の造成層より青磁、白磁、青花等が僅かながら出土。2月13日～18日、D－2区第Ⅲ～Ⅳ層を掘り下げ、C－1区試掘トレンチを拡張。C－1第Ⅵ層下に1.5～2mの黄褐色土の造成層を検出、D－2区南辺沿いに新たに礎石2基を検出する。南側で6基、1間幅約2.4mの、5間建物であることが確認された。C－1第Ⅶ層で赤色に塗った鉄釘3点が得られた。D－2区造成層の大きな石をチエーンブロックを用いて撤去作業を実施、最下層まで掘り下げて完了し、D－1区に拡げる。基壇壁南東隅から北側1mのところで、直角に東方向へ延びる張り出し翼廊状の遺構を検出。C－1区試掘トレンチの掘り下げで、黒灰層（遺物包含層）が石垣の下に延びることを確認し完了する。D・E－1区基壇東壁沿いで礎石を1基検出。2月20日～29日、E－1･2及びF－2区第Ⅲ～Ⅵ層の発掘作業。基壇東壁沿いに1間幅2～2.1mの礎石を新たに3基検出、東辺の礎石配置と南辺沿いの礎石は1間幅が若干異なり、北側はレベル的に高くなり、更に基壇北壁沿いに2基の礎石を検出、北東隅の1基は抜かれていることが分かった。

E－2区第5号土坑は第Ⅵ層まで掘られ、ヤリガンナ、ヤットコ、青花碗、皿が出土。遺構は北辺側で1基検出、これで基壇に伴う礎石は南側、東側、北側で確認され、その概要が把握された。また、西側では検出されず、基壇本体に接続する張り出しの翼廊状遺構

は東側で検出されている翼廊状遺構と相対することが分かった。更に造成層の確認トレンチ（東西トレンチ）を掘り下げ、版築造成層の検出作業、写真撮影を行い第６次調査は終了した。

第７次調査（1984年８月13日～1985年１月22日）

第６次調査に引き続きＡ－３区から始めた。また、あわせて志慶真門郭と大庭郭を繋ぐ通路の調査も行った。その結果、志慶真門郭からの傾斜面では自然の岩盤を階段がわりに利用、凹部に簡単な踏み石を所々に置くだけのもので人工的な構造物を伴うものではなかった。また、主郭の南側石垣の外面では二重、三重の積み上げが見られたが崩れが著しく全面的な確認には至らなかった。９月６日～10月２日、第８号土坑を完掘、引き続き遺構の実測作業に入り、Ｅ－１・Ｆ－１区の石垣の検出作業をすすめる。表土面より中国陶磁をはじめ、タイ陶磁、鉄製品、自然遺物などが得られた。第９号土坑を完掘し、実測作業に着き、Ｂ－１区の石垣の面出し作業をすすめながらＦ－３区に取りかかる。Ｆ－３区、基壇の北西隅で方形石囲いの遺構を検出、囲いの中から骨製のサイコロ、球状土製品、中国陶磁が出土、方形石囲い遺構を写真撮影し、西側の石垣の検出作業を継続してすすめる。10月11日～10月31日、第10号土坑を完掘、Ａ－１・Ｂ－１区にかけての東側の石垣面及び西側の石垣も検出する。Ｂ－１区第Ⅱ層（25～30㎝）で古銭が集中して出土。

第11号、12号、13号土坑を完掘し、写真撮影を終え実測作業にかかる。西側土留め沿いにトレンチを入れ、Ａ－１区の南北トレンチの発掘作業をすすめる。

Ｃ－１区で石垣の基部を検出、石垣は灰層（第Ⅶ層）直上に積まれることが確認された。併行してＤ－３区の土留め遺構の発掘作業をすすめる。11月１日～11月26日、第Ⅸ層の発掘で青磁鎬蓮弁文碗、カムィヤキ須恵器などが出土、引き続きＣ－３・Ｄ－３・Ｅ－３区で土留め遺構の発掘を実施。奈良国立文化財研究所のメンバーと基壇の遺り方測量を開始する。

基壇の実測作業にかかりながら、西側土留めの発掘作業を行う。大庭側に１ｍの幅を設け作業を実施した。その結果、大庭でも人頭大の角礫を詰めて造成がなされていることが分かった。Ｃ－３・Ｂ－３区（火の神祠前庭部）の調査を終了、土留めに沿ってピットが検出。第Ⅰ期造成のひろがりを把握するため、Ｂ地区からＣ－３区にかけて３ｍ×１ｍのトレンチを設け作業を行う。Ｂ－３区で東西に延びる石敷面の検出作業のためトレンチを北側に拡張する。11月24日、基壇東側の翼廊状遺構と直角に並ぶ石列遺構の発掘作業を行う。また、Ａ－１区南東隅で石門が検出された。Ｂ－３区からＢ－２区へ延びる石敷遺構の検出作業を終了。遺構は幅約１ｍ、長さ約９ｍの石敷であることが確認された。

11月26日～12月26日、Ｃ－３・Ｄ－３区のピット群の実測図面を作成、また、主郭南西隅の石垣の発掘作業を行う。大庭郭から主郭へ上る階段の発掘作業を行いながら、Ｄ－１区で発掘をすすめる。発掘を終え、第Ⅱ期造成最上層のピット群の平面図を作成。しかしながら、建物遺構の把握には至らなかった。Ｄ－３区の土留め石積みの検出作業を終

了、また基壇東側の翼廊状遺構沿いから西側へ設けたトレンチで、第Ⅰ期造成の版築層を完掘する。版築は丁寧になされ、土留め石積みの内側で終わっていることが確認された。また、Ｅ－１区での試掘トレンチの最下層（第Ⅸ層）を終える。遺物は土器を主体に白磁口禿皿が得られた。版築層の写真撮影を行い、Ｅ－１区の残り第Ⅴ層から作業をすすめる。出土遺物は白磁碗、青磁酒会壺、カムィヤキ須恵器、刀子、鉄製角釘、骨製サイコロ等が出土。自然遺物ではウシ、ウマ、イノシシの骨が多く、小形の貝類も多量に得られた。1985年１月５日～12日、Ｄ－１・２区第Ⅸ層の完掘により、土留め石積がより明瞭になる。基壇内Ｅ－２区で試掘を試みる。これまで発掘をすすめている基壇南面の東西トレンチ及び基壇東の南北トレンチの層序を検出、写真撮影を終える。基壇内の試掘により、基壇の中は大きさ５～15cm の角礫を詰め石として入れるものであることが分かった。なお、角礫下で遺物包含層が認められ、柱穴が２基検出された。十字状に試掘トレンチを設け、合計して東西に７基、南北に３基の柱穴が認められた。後は実測作業に取りかかった。

ＰＬ.４　遺構実測作業

ＰＬ.５　基壇建物跡内の試掘状況

第８次調査（1985年９月25日～12月９日）

第７次調査に続く調査である。主郭全体の除草及び発掘による盛土の除去作業を行い、第Ⅳ期の建物礎石、Ｃ－３区の「火の神祠」の実測作業を行う。実測作業終了後に「火の神祠」の石壁を解体、他の場所に移動し、復元に備えた。埋まっている石壁を検出し、実測作業にかかる。「火の神祠」建物は、壁部分を約40cm ほど掘り凹めてから石積みがなされ、建物の周りを切石により縁取り、更に祠入り口では石を敷き、祭壇を設けていた。石敷き面から祭壇にかけては石灰が敷かれる。Ｆ－３区北側石垣沿いの発掘作業を行い、Ⅶ層面まで掘り下げピットを検出、遺物は青磁鎬蓮弁文碗、同酒会壺、白磁口禿皿、土器、自然遺物などが出土した。引き続き基壇北側西半分の発掘と東側柱穴及び柵列跡の検出作業を行う。

建物跡は第７次調査で確認された柱穴と考えあわせると、東西約 14.60 m、南北約 9.10 mの略方形状の掘立柱建物になることが把握された。また、柵列跡を検出し、写真撮影を行った。柱穴の実測作業を行いながら、「火の神祠」移動予定地（Ｂ－１区）の雑石の後片づけをして、発掘作業に取りかかる。11 月６日、掘立柱建物の西側（翼廊前）で建物の柱穴と柵列跡の柱穴、そして、東側で 11 本の柵列跡を確認、これで東、北、西で柵列跡が確認された。Ｆ－３区で新たに２本の柵列跡が確認され、柵列跡の西北隅のコーナー部が明瞭になる。これにより、柵列跡は東～北、北～西と結ばれることが分かった。11 月８日～ 11 日、Ｂ－１区第Ⅲ層、Ｃ－１区第Ⅴ～Ⅶ層の発掘を続行、Ｂ－３区で柵列跡の検出し、北側柵列跡の柱穴の実測作業にかかる。Ｂ－３区で第Ⅷ層直上面（黄褐色土）を削り柱穴を確認。基壇西側沿いから南へ８本の柵列跡が確認。引き続き、Ｃ－１区第Ⅳ層（版築）上の石列遺構内の雑石（拳大）を除去、第Ⅴ～Ⅶ層まで掘り下げ、第Ⅷ層上面より柵列跡の柱穴、５本が確認される。これで東側の柵列跡はほぼ検出された。第Ⅴ層下で、青磁口折皿、ビロースクタイプの白磁碗、また第Ⅶ層の柵列跡より土器が集中して得られた。11 月 15 日、Ｂ－１区東側沿い第Ⅳ層はかなり厚く、しかも石が大きくハンマーで打ち割って除去した。

Ｃ－１区の第Ⅴ～Ⅶ層の発掘を行いながら、並行してＥ・Ｆ－１区でピットの検出作業をすすめる。結果、東側（№.4）の柱穴内で木炭が集中、柱が焼けた状況で直径約 20㎝ の柱だったと考えられる。柵列跡の柱穴は 11 月６日時点で発掘したが、掘り足らなかったのでそれを完了、結果として２段掘りが多いことがわかった。これで、柵列跡の柱は東、北、西の三辺とも直径約 10㎝ 前後、深さが 30 ～ 70㎝ のものであることが確認された。掘立柱建物跡の北、西側を実測しながら、Ｃ－１区の柱穴状況の写真撮影を行う。

11 月 18 日～ 12 月２日、Ｂ－１区第Ⅵ層の発掘、土留め用石積み部分の頭が出はじめ、更に延びるようなのでＢ－１区へ拡張した。第Ⅳ層は石垣沿いではかなり厚く、大きい石は焼いて割ってから取り出した。また、第Ⅵ層と第Ⅶ層の間には黒色の灰層が厚く堆積、石垣の下に延びることが確認される。一連の作業状況を写真に収め、柵列跡（東側）の実測を行う。Ｂ－１区では石垣と土留め石積みの間に第Ⅷ層は無く、第Ⅸ層まで掘り下げ完了。大きな石を用いた土留め石積みを検出、石積みは雑であるが南半分では小さな石を用いての面調整が認められた。遺物は第Ⅶ層下部で鉄製ノミ、第Ⅸ層で土器、カムィヤキ須恵器を主体に青磁鎬蓮弁文碗、獣魚骨（ウシ、イノシシ等）の動物遺存体とマガキガイが得られた。柵列跡及び火の神祠下の第Ⅲ層面の土坑などの実測を行い、第Ⅸ層面での撮影と鉄製品、牛角の撮影を終える。また、第Ⅶ層面で新たに柵列跡５本を検出した。これにより、東側で 20 本、北側で３本、西側で 15 本をそれぞれ検出した。土留め石積みの内側は版築造成（第Ⅷ層）がなされ、土留めとしての機能が働いていることが分かった。Ｂ－１区を完掘、Ｂ－１の平面と断面及び土留め石積み、柵列跡などを撮影する。12 月３日～９日、Ｃ－１・２・３区を終了、Ｃ－３区（火の神祠下）の第Ⅷ層はＤ－３・Ｅ－１区同様に入念な版築層で、厚いところで約 40㎝ を計り、第Ⅸ層は黒色土層で岩盤上に約 10㎝ の厚さが認められ、土器と僅かに青磁蓮弁文碗、マガキガイなどが得られた。

Ａ－３区南側沿いの楕円形焼土面（1.5 m× 1.1 m）の掘り下げを実施、並行してＡ－３

区で検出された石段上面の踊り場の確認のため1.5ｍ×1.7ｍのトレンチを設定し掘り下げる。Ａ－２区焼土面下部は火を受け赤化した角礫が敷かれ、中より僅かの食料残滓が認められた。また、Ａ－３区での踊り場は検出されず、第Ⅳ層上面で土留めの石積みを検出（基壇時期）、その内側に第Ⅱ期の造成層が確認された。Ｃ－１区の石積み及びＢ－３区柵列跡の断面実測作業を行い、主郭全体の発掘調査を終了。その後、資料整理は1990年までに実施した。

ＰＬ.６　資料整理作業

ＰＬ.７　主郭調査区全景（南から）

第Ⅲ章　遺　　跡

第１節　遺跡の位置と歴史環境

今帰仁城跡は村の西方、字今泊区にあって古生代石灰岩を主とする標高約 90 ～ 100 m ほどの丘陵上に築かれる。今帰仁村は沖縄本島北部の本部半島北東側を占め、農業中心の産業構造を有する村である。地質構造的には名護、久志嘉陽層と今帰仁層が城跡東側の志慶真川の谷間を軸として、東側の今帰仁層と西側の本部層に分類されている。

村の総面積は 39.0 ㎢で、土壌は概ね国頭マージと島尻マージで、山間部・傾斜地に国頭マージ、低地の沖積地は島尻マージが広がり良好の耕作地を形成している。村の東方約 1.5 ㎞に有人の古宇利島があって、定期船で 15 分の時間である。南側中央に標高約 290 mの乙羽岳があり、そこを軸に東西へ山地が広がり、城跡近くまで続いている。

乙羽岳周辺には国・県指定天然記念物のリュウキュウヤマガメ、イボイモリ、クロイワトカゲモドキ、フタオチョウ、コノハチョウやその他の貴重な小動物の生息する良好の環境地としてあり、近年のいわゆる「リゾート法」制定後に於ける民間資本によるゴルフ場計画や分譲施設等の計画が殺到、開発と自然環境保全の問題が派生している。

海岸線が東側から北・西側に続き、それに沿ってラグーン及びリーフが発達している。貝や魚の棲息するこれらの珊瑚礁域も特に近年の山地・農地の規模拡大事業、大小土木工事等による赤土や生活雑排水の流出で海岸線の環境条件は悪化がすすんでいる。

城跡は字今泊集落の南方丘陵上に築かれ、東側は谷間になり志慶真川が南から北へ流れる。後背には標高約 180 mの「クボーヌウタキ」（拝所）、南側には志慶真集落の伝えがあり、城跡との関連でその確認が必要になっている。西側は傾斜度の緩い丘陵地形で、付近は遺構が確認されているところである。時期の詳細は不明であるが、集落跡らしい石垣の囲いや方形状の石積み、ミームングスク・シニグンニ・ターラグスク等が残存、他に小さな石積み４基が確認され、城跡との関係が注目される。また、今帰仁ノロ殿内・オーレー御殿・供のかねノロ火の神の祠・古宇利殿内等の拝所も多く、参拝客も絶えない。このような環境下にある今帰仁城跡は多くの郭を有し、志慶真門郭・主郭（俗称本丸）・大庭・御内原・大隅などと称される各郭には、大小の平場があって、今後の調査が待たれる。そのうち、志慶真門郭・主郭（俗称本丸）は調査を終え、遺構整備もほぼ終了しその活用がはかられている。

今帰仁村内の遺跡は、これまで確認されているだけで 40 余遺跡にのぼる。遺跡は海岸線沿いに多く見られ、内陸部では少なく、丘陵の小高いところにはグスクが築かれている。現在知られている中で最も古い時期のものでは、沖縄編年前期（縄文後期相当）に位置づけられている運天貝塚・仏ン当遺跡などがあり、今後の調査・発見により更に古い時期の遺跡が見つかる可能性がある。同中期（縄文晩期相当）のものとしては 1976 年に調査された渡喜仁浜原貝塚や古宇利島の古宇利原Ａ遺跡など多く確認されている。また、同後期

（弥生～奈良・平安時代並行）のものとして、越地貝塚・仲尾次貝塚などがあり、いずれも海岸線近くに立地する。

グスク時代のものとしては、今帰仁城跡の他にシイナグスクなどがあり、古生代石灰岩による石積みの遺構を伴うグスクである。これらのグスクは丘陵頂上部に築かれ、視界がよく効くところに位置を決めている。今帰仁城跡は、特に著名で沖縄のいわゆる「三山時代」のものである。これら各時期の遺構の関係については詳細が不明であるが、その解明については今後の調査･研究に委ねられる。城跡北側に「ミームングスク」、更に西側にかけての「シニグンニ」や「ターラグスク」などの石積み遺構や「屋敷跡」と考えられる石垣囲いが知られている。1984・85年に実施された今帰仁城跡周辺の遺跡範囲確認調査では、特に西側地区でピット状遺構や土留め石積み、石敷の遺構などが検出、それに伴って14～16世紀代の中国陶磁が出土している[註2]。

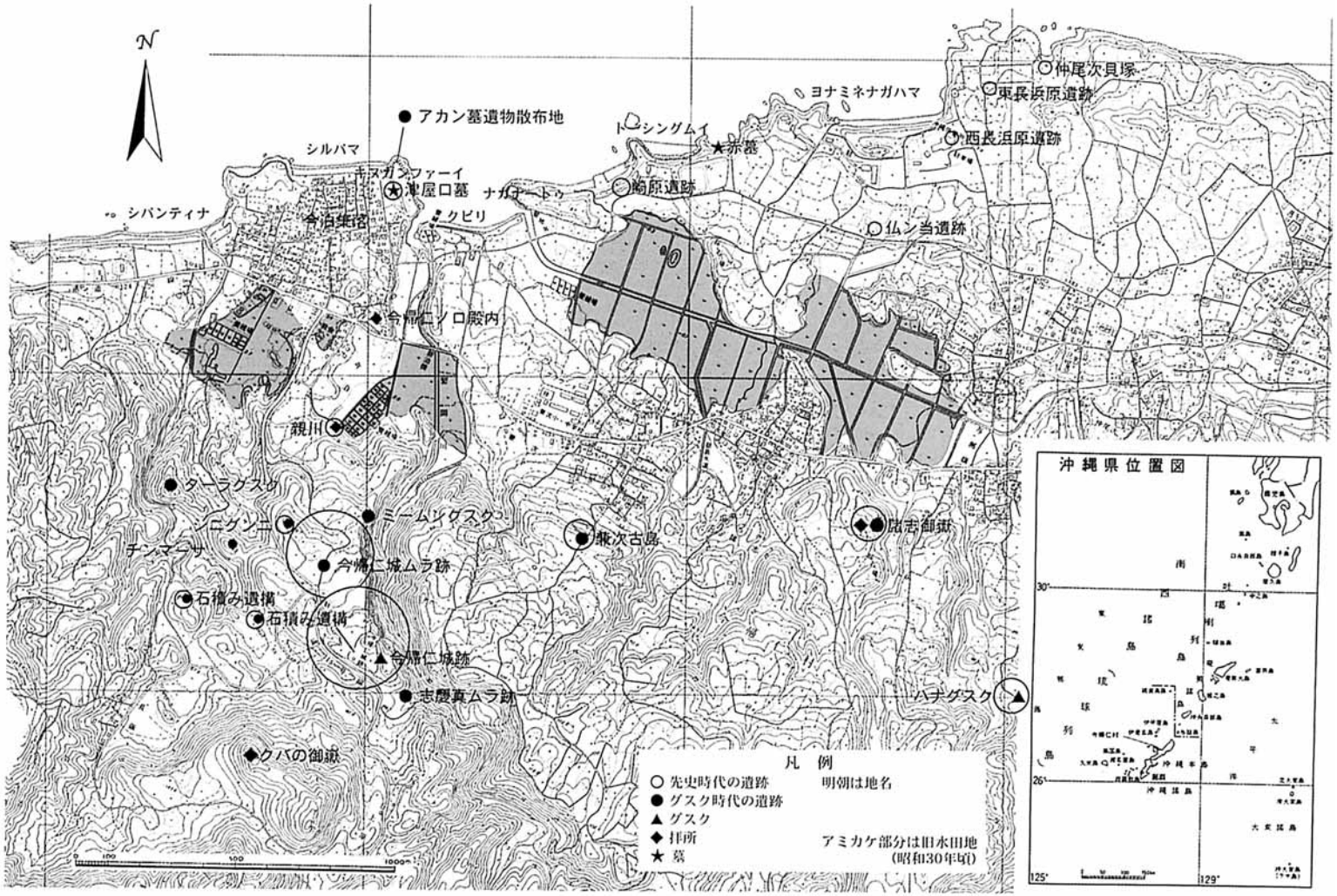
城の調査から人々の生活は今のところ、13世紀末頃に始まると考えられ、13世紀以前の生活状況の有無については今後の調査・研究に期待されるが、城の築造が13世紀代にはじまることが調査で明らかになった。このような歴史背景を経て、14世紀後半頃になると歴史記述が見えるようになる。

今帰仁城跡に関する歴史文献は多くなく、これまでに確認されている古い資料として『明実録』がある。記述によれば、太祖実録巻一五八・洪武一六年一二月庚午朔（1383年12月25日）「琉球國山北王帕尼芝、遣其臣摸結習　貢方物、賜衣一襲」と記され、山北王（今帰仁城主）帕尼芝の名称が記述されるのを似って嚆矢とするようである。以後、珉、攀安知の王名が記され、対明国（中国）貿易が行われたことを記録している。当時にあっては沖縄本島北部地域と奄美大島近隣まで領域として支配していたようである。この時代は沖縄本島の北部地域を山北、中部地域を中山、南部地域を山南がそれぞれ支配する沖縄のいわゆる「三山鼎立」の時代である。山北は1416年（1422年説もある）に中山の尚巴志によって滅ぼされ、その歴史は幕を閉じる。それ以後、中山による監守制度が設置され、1665年にはこの監守も廃止される。その間、1609年には薩摩軍による琉球への侵入があり、今帰仁城に立ち寄っていることが従軍日記である「琉球渡海日々記」に記されている。日記によれば「首里城へ向かう途中、運天港に停泊、親泊での和議が受け入れられず城へ放火した」とするものである。

これまでの、主郭及び志慶真門郭の発掘調査では大がかりな火事による焼失跡は確認できていない状況である。以上の経緯を辿る山北・今帰仁城も監守廃止後は手つかずのままになっていたようである。沖縄の日本復帰と同時に国指定の史跡に指定され、1980年より村教育委員会によって環境整備事業がすすめられている。

註文献

2. 今帰仁村教育委員会1986年『今帰仁城跡周辺遺跡範囲確認調査報告書』



第２図　今帰仁城跡周辺地形図

第２節　層　序

主郭（俗称本丸）の層は大きく分けて、遺物を包含する堆積層と、敷地拡張による造成層から成り立っている。本調査区は、下記に述べるように、その両者の繰り返しが明瞭に確認できる形で検出された。このような例は、いわゆる「グスク」の発掘調査では希有なことでありその点において、今後、グスク時代の変遷及び土木技術のありかたを知る上で、極めて重要な位置を占めてくると考えられる。層序は地山を含め10枚確認でき、その内４枚が造成層となっている。

以下、本地区の標準的層序を示すＤトレンチ１～３を中心とし、その他の地点については、適時に述べる。

第Ⅰ層－　暗褐色を呈する腐食土で、１ライン（東側石垣沿い）で、20㎝前後その他の地点では10㎝程の厚さをもつ。遺物は第Ⅱ層に次いで多く、特に青花と三彩の出土が目立つ。また、自然遺物では、大形のシャコガイが大量に検出された。【時期区分　第Ⅳ期】

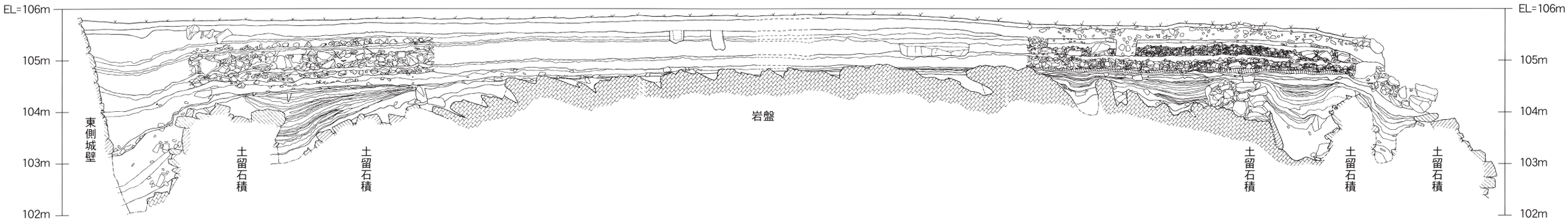
第Ⅱ層－　黒色の土層で、厚さは１ラインのＡ～Ｃトレンチにおいて50～100㎝と厚く、他の地点では20㎝程と薄い。最も遺物の多い層で、総体的に０～30㎝のレベルで集中して検出され、それ以下では漸次減少していく。青磁、白磁などの陶磁器及び食料残滓が膨大で、１ラインＢトレンチ０～30㎝ではアラスジケマンガイがマウンドをなすほど集中して検出された。

なお、１ラインＡ～Ｃトレンチでは、青花の出土が30㎝以下では確認されない。よって、同層では時代性を考慮して、便宜上０～30㎝までを上部、それより下を下部とした。【時期区分　第Ⅲ期】

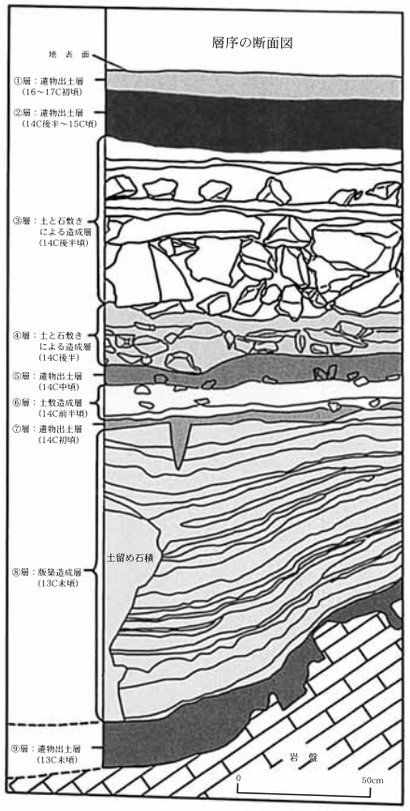
第Ⅲ層－　角礫（古生代石灰岩）と土による造成層。厚さはＤ－１地点で120㎝と厚くＤ－２で50㎝、Ｄ－３で30㎝と漸次薄くなっている。地点により、層の枚数が異なっている。下表に示すように、Ｄ－１で６枚、Ｄ－２で４枚、Ｄ－３で３枚の層で敷地拡張のための造成がなされている。遺物は、ほとんど含んでいない。【時期区分　第Ⅲ期】

Ｄ－１	Ｄ－２	Ｄ－３
①　砂混じりの茶褐色土層		
②　砂質層		
③　10～20㎝大の角礫を敷きならし、その上から赤土で被覆した整地層。	③　同　左	
④　炭混じりの灰褐色土層	④　同　左	④　同　左
⑤　赤褐色土層	⑤　同　左	⑤　同　左
⑥　20～30㎝大の角礫層、所々に１ｍ大の巨石を配置する。	⑥　同　左	⑥　Ｄ－１、２に比べ角礫が３～10㎝と細かく、総じて丁寧な角礫石敷造成層。

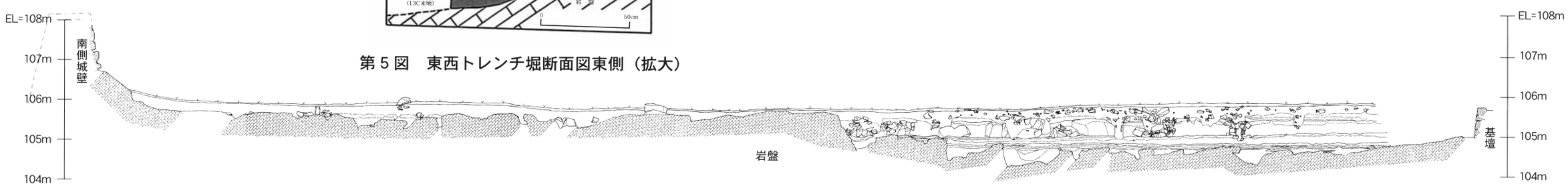
第１表　第Ⅲ層（造成層）の地点間相関表



第３図　東西トレンチ土層断面図



第５図　東西トレンチ堀断面図東側（拡大）



第４図　南北トレンチ土層断面図

第Ⅳ層－　角礫と黄褐色の土を敷き詰めた造成層。Ⅲ層と同様、地点により層の枚数や造成の丁寧さにも違いをみるが、基本的には２枚１組の単純な造成層である。厚さは20cm程で、まず５～10cm大の角礫を15cm厚程敷き詰め、その上に３～5cmの黄褐色土で被覆して整地している。Ｄ－３地点では1、2に比べて角礫が丁寧に敷かれ、更にその下に１～5cm大の小角礫層が３～5cm厚で密に敷かれている。遺物は、ほとんど含んでいない。
【時期区分　第Ⅲ期】

第Ⅴ層－　黒褐色の土層で、厚さはＤ－１・３地点で５～10cm、Ｄ－２では漸次薄くなり一部存在しない所もある。また２の一部から３にかけては、砂混じりの赤土が間層（1～5cm厚）としてあり、短期間に部分的な整地が何度か行われたものと考えられる。遺物を含む生活層としては最も薄く、土器、カムィヤキ須恵器、中国陶磁器、食料残滓等が検出されるが、量的には少量である。【時期区分　第Ⅱ期】

第Ⅵ層－　遺物を伴わない黄褐色土層と、遺物を含む黒褐色土層からなる２枚１組の造成層である。前者は、Ｄ－2、３の一部を除いて１～5cm厚で固く敷きならされ、しまりがある。その上に黒褐色土層が敷きならされ、層厚はＤ－１で50cm と厚く２の中間あたりで漸次薄くなり、３には存在しない。若干の遺物が含まれるが、層の上部と下部の状況が一様になっていることからして、生活による自然堆積とは考えにくく、おそらく地ならしを意図した造成で、一気に堆積したものと考えられる。【時期区分　第Ⅱ期】

第Ⅶ層－　淡い黒褐色土に砂が混ざった層と灰層からなっている。層厚は、Ｄ－１で50cm程あり、石垣の下に堆積している。Ｄ－2、３では２～10cm と薄く、２では存在しない所もある。遺物は、土器を主体にカムィヤキ須恵器、中国陶磁器、食料残滓等が検出される。陶磁器では新安タイプの青磁とビロースクタイプの白磁碗の出土が目立って多く出土。また、１ラインＦトレンチでは貝塚を構成しており、とくに小形の二枚貝、巻貝が多種多量に検出される。灰層は、Ｄ－１の土留め石積みの外に間層としてあり、一気に堆積したもので遺物は含まれていない。【時期区分　第Ⅰ期】

第Ⅷ層－　黄褐色、赤褐色等の土を突き固めた丁寧な版築層である。まずＤ－２周辺の原地形最頂部の岩盤をある程度削平し、次にＤ－１とＤ－３の傾斜面に土留めの石積みを築き、その内側で版築が行われている。１～5cm厚の版築層が、Ｄ－１側で28枚、Ｄ－３側では多い所で19枚確認できる。遺物がほとんど含まれていないことからして、土は城外から持ち込まれたと考えられる。【時期区分　第Ⅰ期】

第Ⅸ層－　黒褐色の遺物包含層で、主郭最古の生活文化層である。Ｄ－１斜面部では15～20cm の厚さで土留め石積みの下をもぐり、更に第Ⅶ層の下を通り石垣外まで延びている。Ｄ－２では殆ど認められない。Ｄ－３では岩盤のくぼみに10～20cmの厚さで認められる。遺物は、土器を主体に、若干のカムィヤキ須恵器、中国陶磁器、食料残滓等が検出され、なかでも、マガキガイの単独的な出土が目立った。【時期区分　第Ⅰ期】

第Ⅹ層－　古生代石灰岩の岩盤とその風化土層で、いわゆる地山である。Ｄ－２周辺の岩盤頂部は、版築平場造成の際に削平され、原地形をとどめていない。

第３節　遺　構

今回行った主郭（俗称本丸）の調査で検出された遺構は層序・遺物とあわせてⅣ期区分した。これに現在も継続的に参拝者の訪れる「火の神祠」などの監守が城下へ移り住んで以後の遺構を便宜上Ｖ期として以下に記す。各遺構の図化記録は今帰仁城基準点Ｔ－17（Ｘ＝76,130.23　Ｙ＝43,011.54）を座標の原点としＸ＝100、Ｙ＝100を与え遣り方を設定した。本地区の方位は平面直角座標系第15系の北より東へ8°0′00″振ったものとする。以下遺構図中のＸ.Ｙの方位・座標値はこれに準ずる。記録化は沖縄県教育庁文化課及び奈良国立文化財研究所の指導のもとに行った。実測図化は一部土坑に関しては平板測量を行ったがほぼ総て遣り方実測で行い縮尺は基本的には1/20とした。掲載した第６図はⅠ～Ⅳ期の遺構図を重ねた図面である。

時期区分

第Ⅰ期（第７・８図）　第Ⅸ層から第Ⅶ層がこれにあたる。13世紀末～14世紀はじめ頃を推定。

①グスクの選地

まず、平坦地の無い尖った石山に城を築く。防御、交通を考慮し好条件の地を選択。築城のために最初に入った人たちが残したのが第Ⅸ層（最下層）である。遺物から13世紀末頃を推定。

②平場造成

尖った険しい石山の傾斜地に土留め石積みをし、その中で版築をして平坦地を造る。版築は３～5㎝の厚さで赤褐色土や黄褐色土を敷いて打ち固めまた敷いて打ちかためる。これを二十数回くり返した丁寧な版築である。

③掘立柱建物と城柵

版築によって平坦地ができると、その上に掘立柱建物を建て、そのまわりに柵をめぐらせている。第Ⅶ層がこれに相当する。

第Ⅱ期（第９～11図）　第Ⅴ層と第Ⅵ層がこれにあたる。14世紀前半から14世紀中頃を推定。

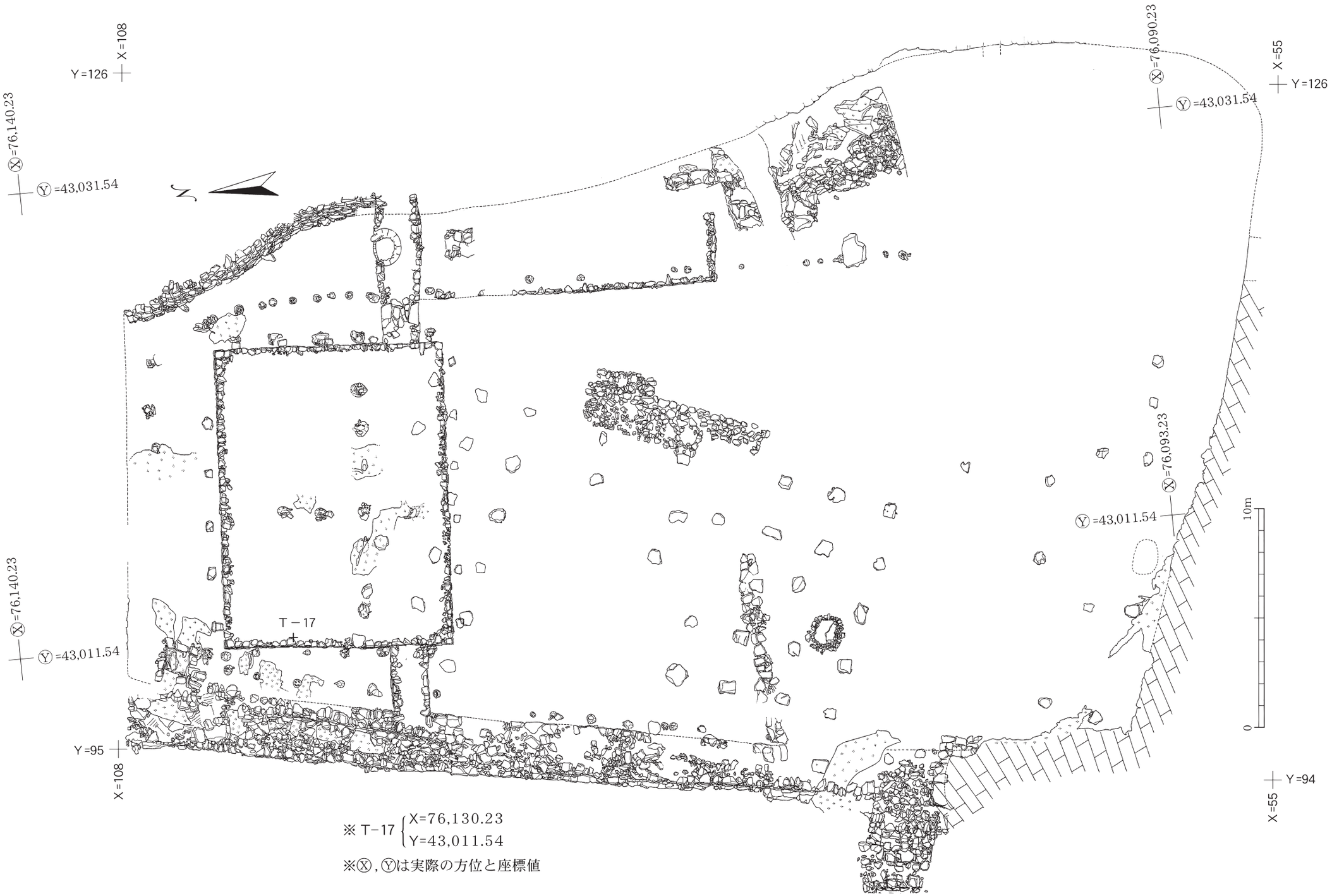
④石垣（城壁）を築く

今帰仁城を代表する石垣がはじめて登場する。

⑤翼廊付基壇建物

石垣をめぐらせた城内に、翼廊付きの基壇建物が建てられる。基壇は約１ｍの高さの石積みで、その上に礎石の建物が建っていたようである。

第Ⅲ期（第12～14図）　層序で言えば第Ⅱ層が本期の文化層で14世紀後半～15世紀前半の中国陶磁器が大量に出土することから、『明実録』の記録と符合する。



第６図　Ⅰ～Ⅳ期遺構重ね図

⑥雑な版築（地形）による平場造成

この地形（業）で第Ⅱ期の基壇が埋められ平場の広さは二倍になる。

⑦基壇のない礎石建物

広い平場を造成したあと基壇のない礎石の建物が建てられる。この時期が中国の明実録に登場する山北王帕尼芝、珉、攀安知の頃である。

第Ⅳ期（第16・17図）　最も新しい文化層である。

⑧最も新しい礎石建物で今帰仁城が首里城に亡ぼされ、首里から監守が派遣されたるいわゆる監守時代の建物跡である。1422年頃から1665年までで、第Ⅰ層（最上層）がこれにあたる。

第Ⅴ期（第18図）　1665年以降「火の神祠」・「石灯籠」・「山北今帰仁城監守来歴碑記」など発掘調査以前から地表面に現れていた遺構で、「今帰仁上り」など現在も参拝者が訪れる施設を廃城以後の構築物として仮に第Ⅴ期とした。

掲載方法

遺構の掲載は各時期毎に掲載した、実測においては先に記したように真北より東方向（8°0′00″振ったもの）を北としているが本文中では真北を記載する。但し座標値は原点にX＝100、Y＝100を座標値として便宜上調査時の仮座標値を記載した。遺構の種類は下記のように分類した。

土留め石積み：造成層の土圧に耐えるために配した石列を「土留め石積み」とした。

造成地形：人為的な造成行為によって敷き均された整地層。

柵列跡：ピット列が郭の東、北、南で検出された。柵列の柱痕と想定される。

石積み城壁：積み石で郭を一周する形で検出された。（石垣）

掘立柱建物跡：柱列が一定の区画をもって検出された場合、建物跡として判断した。

礎石建物跡：建物の土台となる礎石跡で、いずれも古生代石灰岩の板石を単独に設置する。また、砂利が充填あるいは、礫が敷設されているものは礎石が抜かれた跡と考えられこれに含めた。基礎を礎石とする建物跡を「礎石建物跡」とした。

基壇：板石を利用して縁石を成し、角礫を充填させる基壇が検出された。

階段遺構：石と土砂・角礫によって構築される階段が検出された。

石敷き：拳大の礫・板石が充填するものを「石敷」きとした。

石組み遺構：いずれも古生代石灰岩を用いて構築される。上記分類にあたらない石組み穴を「石組み遺構」とした。

土坑：主にゴミの廃棄に用いられたと考えられる廃棄坑を「土坑」としたが、廃棄坑とは考えにくい遺物の出土状況もあり個々の機能については別項に記載する。

第Ⅰ期の遺構（第７・８図）

1. 土留め石積み（第３図）（巻頭図版.5・ＰＬ.10・11・15）　築城の最初の事業がこの土留め石積みである。平場のない尖った石山に城を築くためには平場を造成しなければならない。平場を造成するためには土留め石積みが必要である。

南北に走る尖った石山の西と東に土留めのための石積みが検出された。西側では３列の石積みが、東に２列の石積みが確認された。土留め目的の石積みなので、石積みの面をととのえることなく、無雑さに積まれている。そのかわり、大きな石を用いている。大きいのは直径1.2ｍもある。東側の土留め石積みをみると高い所は約２ｍもある。西側に３列、東側に２列の土留め石積みは土圧を分散するための技法と考えられる。

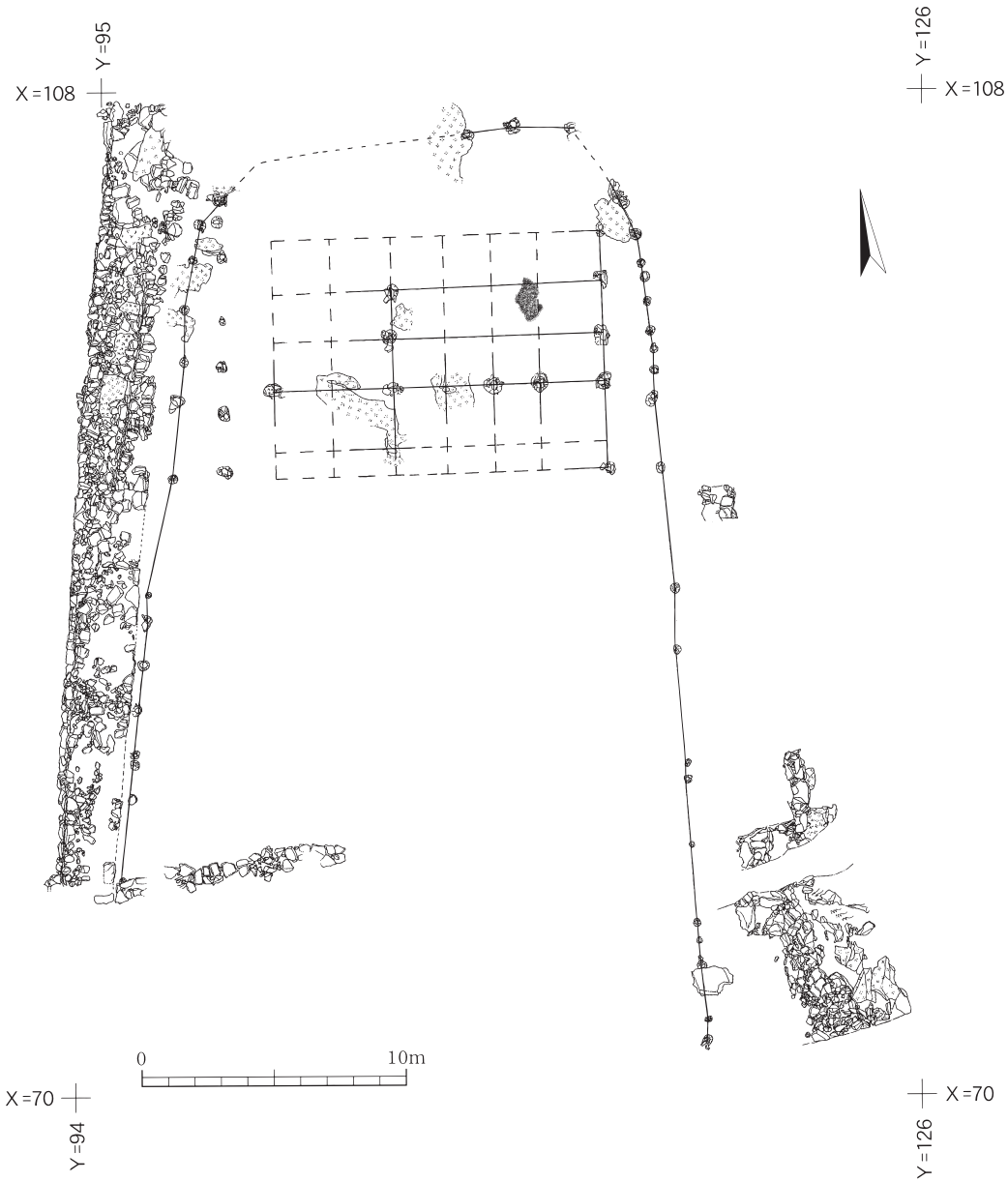
2. 版築造成（第３図）（巻頭図版.6・ＰＬ.10・15）　土留め石積みが終わるとその石積みの内側に土を入れて平場を造成している。この平場造成は「版築」という技法でなされている。２～5㎝ の厚さで土を敷き、打ち固めてまた土を敷いて打ち固める。この方法を多いところでは二十数回ぐらい繰り返されている。

このように打ち固められた土はつるはしをはじき返すくらい固い。版築に用いられた土は赤褐色、黄褐色、黒褐色などの色土であるので、版築は縞紋様を呈している。

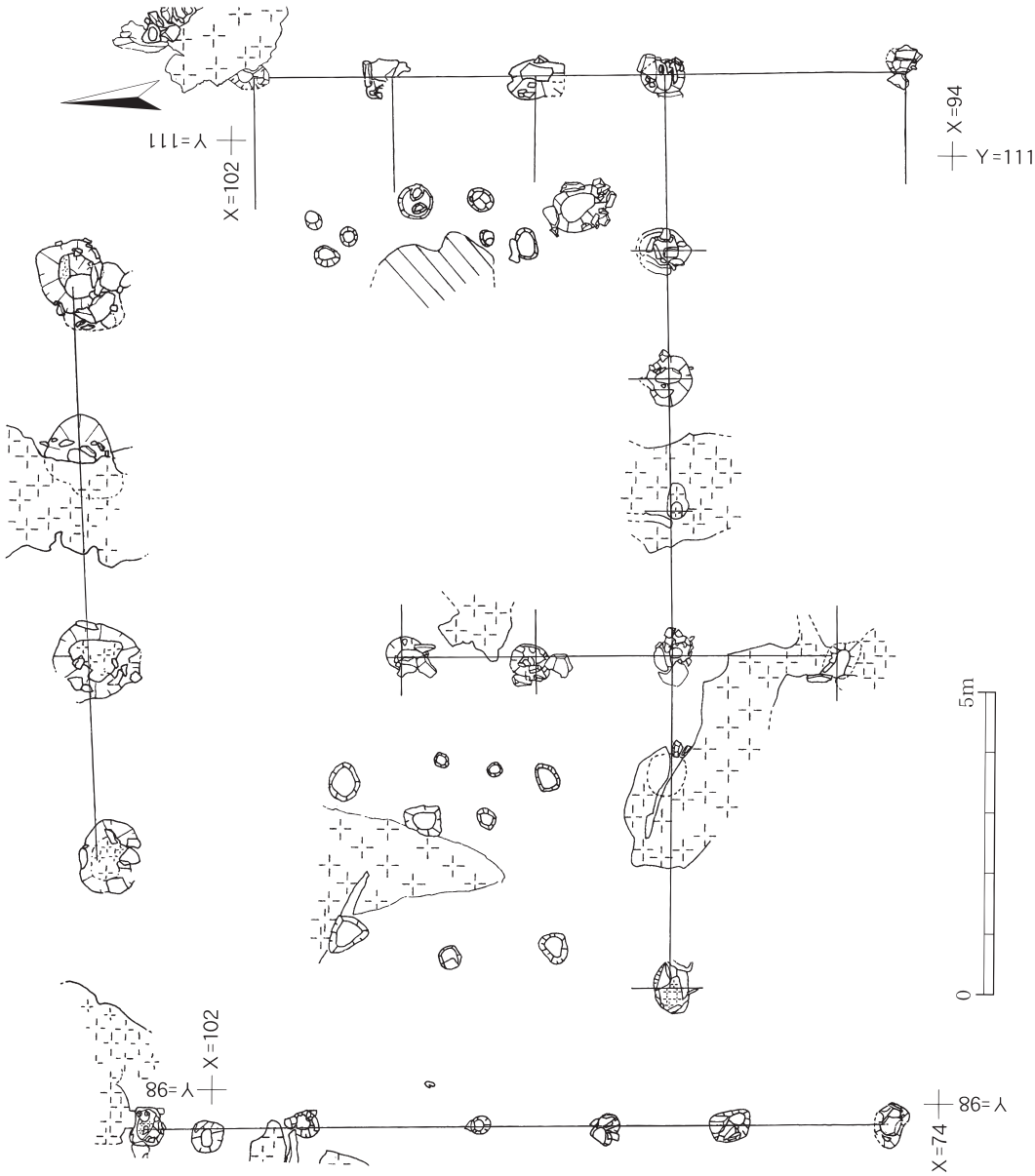
3. 柵列跡（第７図）（巻頭図版.5・ＰＬ.14・16）　平場造成が終わると防御施設として柵を廻らしている。南側は石山になっていたので、柵は東、北、西に廻っている。東に20本、北に３本、西に15本の計38本のピットが列をなし検出された。未発掘の部分で検出される予想本数と合わせると、おそらく60本ぐらいのピットが廻っていたと考えられる。柵の柱穴は深さ40㎝以上のもの21本、30～39㎝11本、20～29㎝６本で深い穴（平均で38㎝）が多い。柱穴の口径は40㎝ 以上６本、30～39㎝19本、20～29㎝13本（平均で31㎝）で深さに比して口径は小さいのが多い。また、柱穴の底径は10～15㎝20本、16～20㎝13本、21～25㎝５本（平均で16㎝）で、直径10～20㎝ ぐらいの柱が使用されていたと考えられる。

4. 掘立柱建物（第７・８図）（ＰＬ.5）　柵が廻らされた平場に掘立柱建物が建てられる。1.8～2.2ｍを１間とする建物と考えられるが、第Ⅱ期の基壇を壊さなければ発掘できない。したがって一部の試掘にとどめたので、プランの把握はできなかった。試掘結果から推測すると1.8～2.2ｍを１間とし、その規模は第Ⅱ期の基壇建物とほぼ同じくらいと考える。柱穴の口径は60～80㎝、深さは50～80㎝、底径は25～30㎝と比較的大きくて深い。底径も25～30㎝と長径になるため、柱の直径は20㎝前後と考えられる。

5. 石敷（第７図）（ＰＬ.28）　南側の石山と西側の柵列が合流するところに幅60～80㎝、長さ9.6ｍの石敷きが検出された。これが第Ⅰ期の入り口（門）と考えられる。一部第Ⅳ期の礎石があるところなどは発掘していないので、実測図ではその部分がぬけている。



第７図　第Ⅰ期　遺構平面図



第８図　第Ⅰ期　掘立柱建物詳細平面図

第Ⅱ期の遺構（第９～11図）

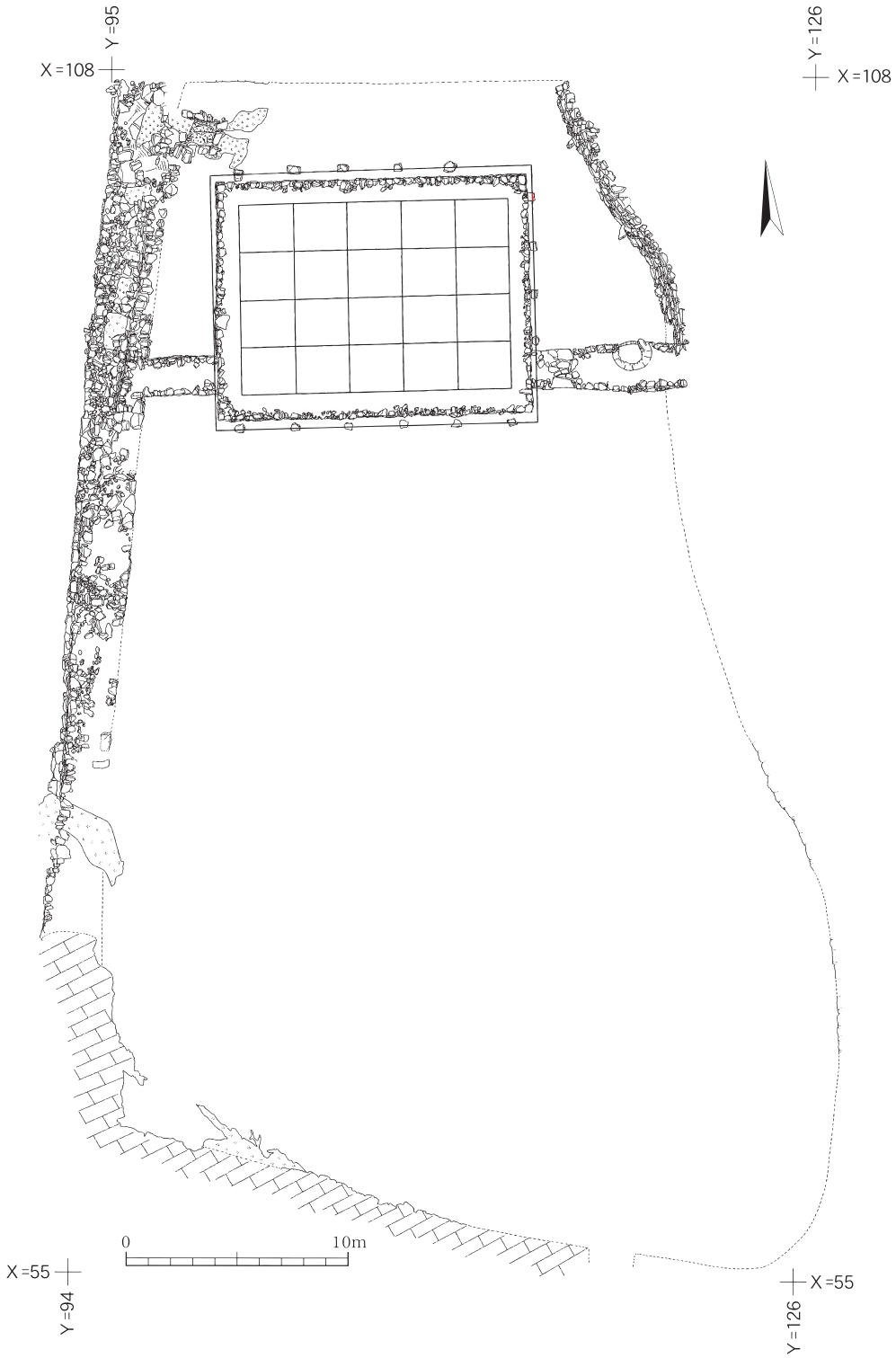
1. 石積みの城壁（ＰＬ.25）　第Ⅱ期になると、第Ⅰ期の柵による防御から石積みの城壁にかわる。柵から石積みへの変化は革命的なことである。東側では第Ⅰ期の土留め石積みの外側に石垣が積み上げられ、西側では第Ⅰ期の土留め石積みの上に石垣がまた積み上げられる。今帰仁城跡を代表する石垣の登場である。石は古生代石灰岩で今帰仁城跡の基盤層と同じ石材を用いる。基本的には大小の割石・自然石を用い横目地を通した形になる、いわゆる「布積み」「布積み崩し」といわれる技法になる。

2. 翼廊付基壇建物跡（第９図）（巻頭図版.４・ＰＬ.18～20）　第Ⅱ期の石垣を築いて最初に建てられたと考えられる建物で、南北10.3ｍ・東西13.8ｍ・高さ約90㎝の石積み基壇に、東西翼廊が東西石積み城壁まで延びている。基壇上本体部分には梁間４間（約8.8ｍ）・桁行５間（12ｍ）の建物が推定され、基壇の周縁を小さな礎石が一間約2.1～2.6ｍ程の間隔で並んでいる。翼廊が東西に延びること、北側は城壁が近いことなどから考えると建物は南向きであったと推測され、出土遺物に瓦が含まれないこと等から屋根は瓦以外のもので葺かれたものと判断できる。なお、基壇上にあったと考えられる礎石はおそらく後世（第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ期）の時期に除去・改変されたものと考えられる。

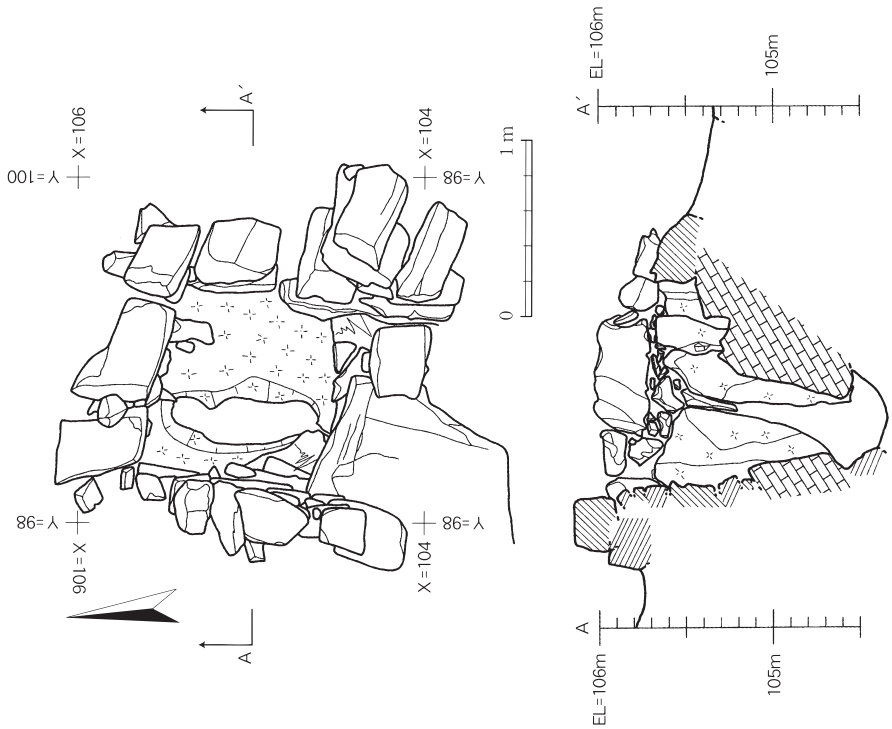
3. 方形石組み遺構（第10図）（ＰＬ.22）　Ｆ－３地区、西側城壁の北に方形の石組み遺構が検出された。機能は判然としないが、東西南北約1.2ｍの平面観方形で深さ約1.2ｍを計る。埋土は灰混じりの黒褐色土で中国陶磁・自然遺物などを含む。

4. 第２号土坑（第11図）（ＰＬ.23・48）　Ｃ－１地区で検出された第２号土坑は青磁碗６点・同皿１点が伏せた状態で一括出土した。最下部は第Ⅶ層におよぶ。試掘坑断面で確認し掘り広げた経緯もあり掘り形は判然としないが、資料整理から第Ⅱ期の時期に比定されると推定される。

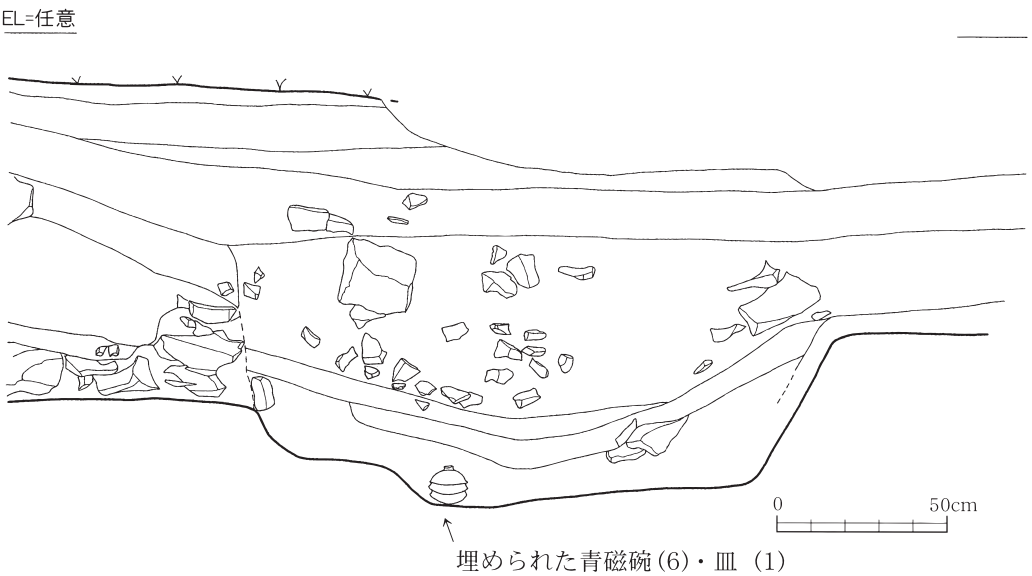
5. 南門（ＰＬ.24）　第Ⅱ期の通用路は南側城壁に設けられた石門でこれは第Ⅲ期の時期に閉鎖されたようである。雑石を撤去して現況の確認を行った。間口は約２ｍ・奥行（石垣の幅）は約4.5ｍである、高さは現況から判断すると約2.7ｍ程と考えられる。床面は径20～30㎝の平たい板石で敷き詰めている。



第９図　第Ⅱ期　遺構平面図



第 10 図　方形石組み遺構図



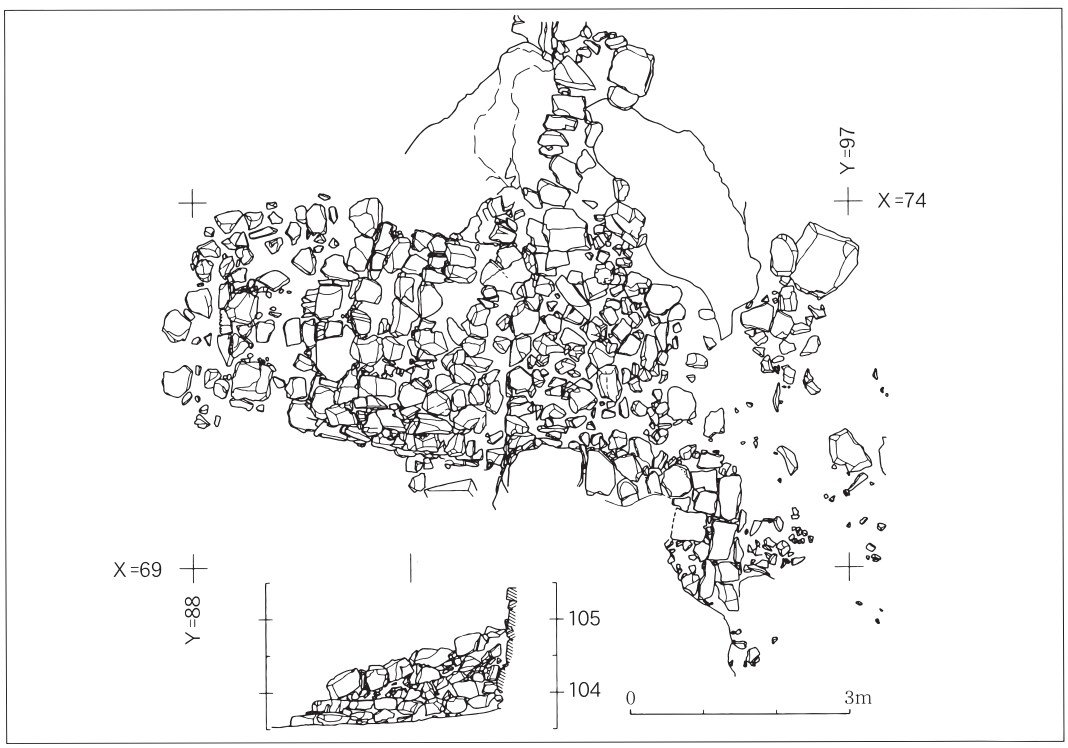
第 11 図　第 2 号土坑断面図

第Ⅲ期（第 12 ～ 14 図）

1. 第Ⅲ期造成層（第Ⅲ・Ⅳ層）（第３・４図）（ＰＬ.10 ～ 13・15）　第Ⅱ期の時期までは南側にあった石山と、北側にあった基壇の上部を壊し大がかりな土木工事を行ったようである。Ⅱ期の翼廊付基壇建物跡とⅡ期の床面は造成土（第Ⅲ・Ⅳ層）によって埋められる。造成層は大きな石（およそ 0.5 ～ 1 トン）から拳大の石及び赤土を被覆し整地している。第Ⅲ層と第Ⅳ層は地形と呼ばれる造成層である。

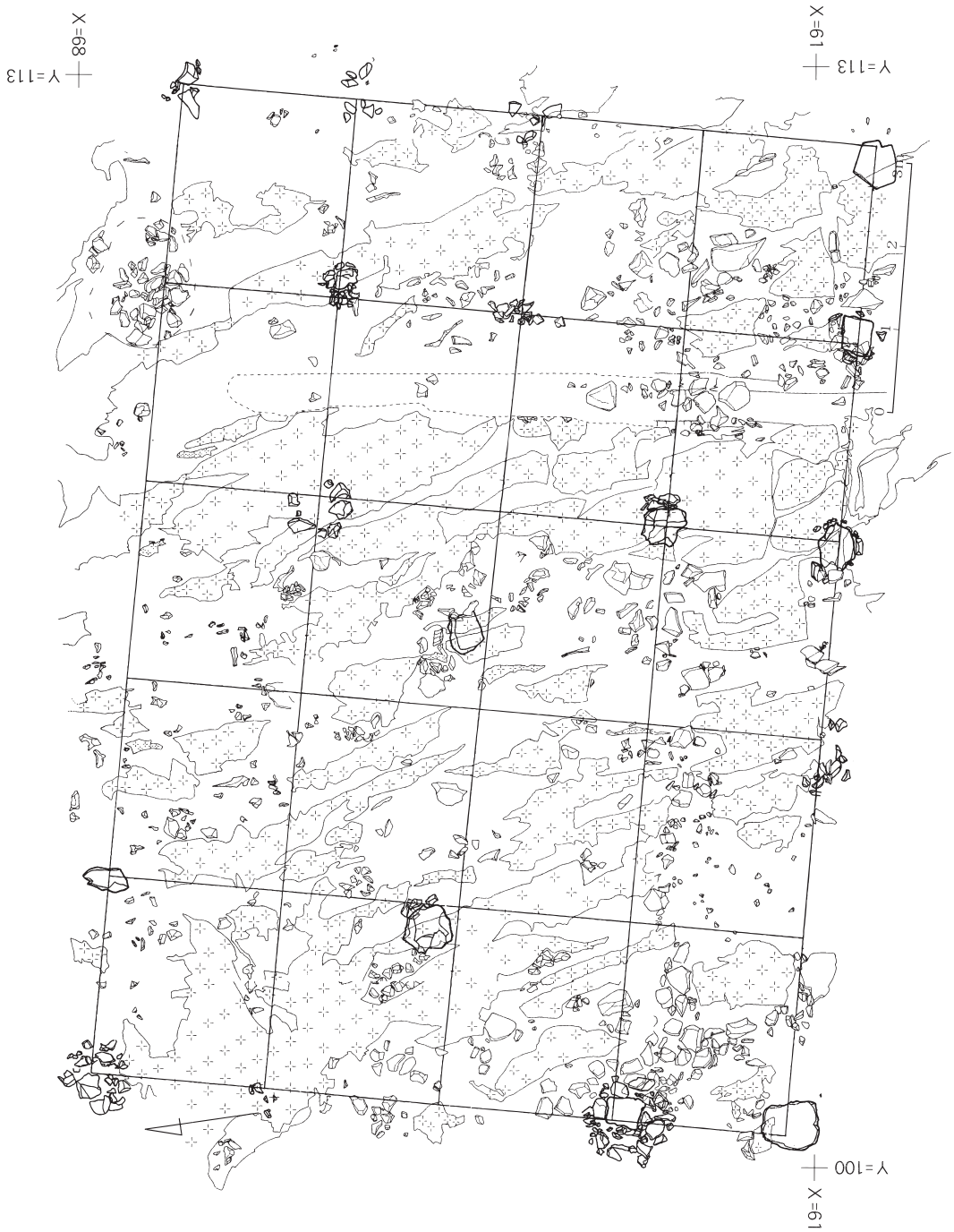
2. 礎石建物跡（第 13・14 図）（ＰＬ.26）　礎石建物跡が南側で確認されている。礎石は抜かれたと推定され判然としないが、ほぼ現位置と推定される礎石が８つ確認される、また礎石根固めと判断される礫敷を結ぶと一間約 2.1 ～ 2.4 ｍを計る。南側石垣沿いには炉跡状遺構が検出されており構造上壁際であることなどを考慮すると若干問題も残るが、志慶真門郭でも同様の焼土面が建物内で確認されており、今のところ建物に付帯した炉と考えられる。また、後述する階段を上がっていく道は石敷きで第Ⅳ期の建物跡の方へ向かっており、調査では判然としなかったものの第Ⅳ期とほぼ同じ位置（本礎石建物跡の北側）には別の大きな建物があったことが予測される。

3. 階段遺構（第 12 図）（ＰＬ.27）　主郭（俗称本丸）と大庭を結ぶ地点西側城壁の南側に石段遺構が確認されている。第Ⅱ期の石積城壁に取り付く形をとるため第Ⅲ期以降に機能した石段と推測される。踏面は下部の数段と上部の数段では基線が異なる。仮に現況から判断して下部を第Ⅲ期、上部を第Ⅳ期とした。



第 12 図　階段遺構詳細図（Ｓ＝１／100）

第 13 図　第Ⅲ期　遺構平面図



第 14 図　第Ⅲ期　礎石建物跡詳細図

第Ⅳ期の遺構（第 15・16・17 図）

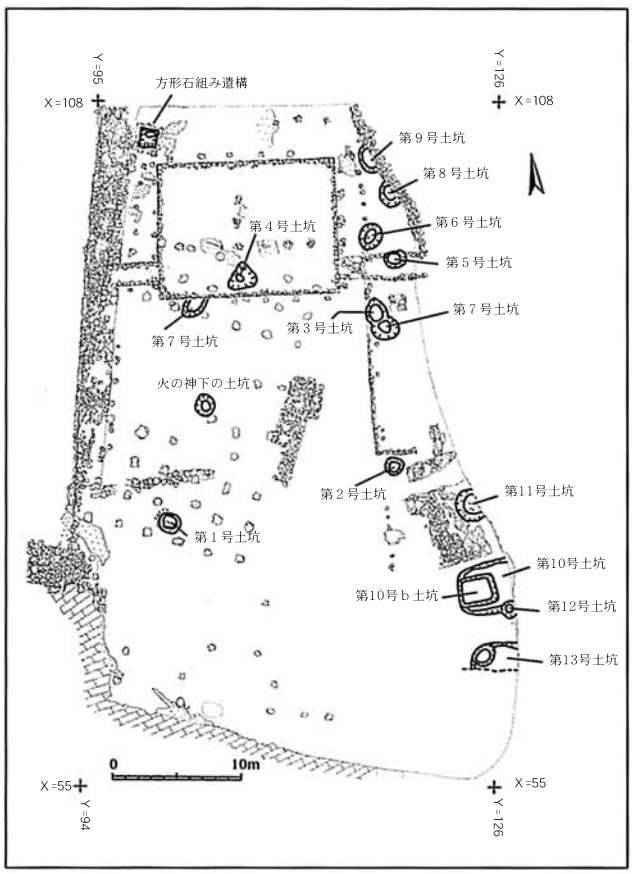
1. 礎石建物跡（第 16 図）（ＰＬ.8・28・29）　礎石建物跡が西側で確認されている。礎石は比較的残りは良いが、中央部に後世の火の神祠が設けられており、調査では火の神祠の下は荒らされており礎石を確認することはできなかった。理由としては建物中央に後世火の神祠を設置したと解釈するか、あるいはもともと建物の無かった空間に設置したのか二とおりの解釈をすることが可能である。前者であれば５間９間の建物（発掘前の調査では６ページの５間８間）を、後者であれば建物が二つあるいはコの字形の建物を推定することができよう。現状では、中央数間が荒らされてよく分からないところもあるが梁間５間（約 12.21 m）、桁行９間（約 21.85 m）の大きな建物と推定される。遺物や層序によって中山の尚巴志に滅ぼされて以後から監守が首里へ引き上げるまでの時期の建物であることから監守時代の建物であったと推定される。

2. 階段遺構（第 12 図）（ＰＬ.27）　第Ⅲ期に構築されると考えられる石段は第Ⅳ期になっても引き続き継続使用されていたと考えられる。先に述べたとおり踏面の上部数段は本期、少なくともⅢ期以降に改修したものと推定する。

3. 石敷き遺構（第 16 図）（ＰＬ.8）　建物に付帯するように東側に石敷き遺構がある。拳大の礫を敷き均し、東側の縁石は礎石建物ラインに並行し５間９間の建物と考えた場合の中央部分にあたる箇所に位置する。機能として建物正面入り口部分にともなう施設の可能性が考えられるが、詳細は検討を要する。

4. 円形石組み遺構（第１号土坑）（第 17 図）（ＰＬ.29・30）　Ｃ－３地区第Ⅱ層を０～5cm 掘り下げた時点で人頭大の礫が円形状に並べられて検出され遺構上面から 60cm までは石組みで、以下石積みは確認されない。土坑下部は地山を掘込み検出された遺物などからも第Ⅳ期を推定する。

5. その他土坑（第３号～第 13 号土坑）（第 15 図）（ＰＬ.31）　第Ⅲ・Ⅳ期に構築されたと考えられる土坑を第２表にまとめた。いずれも黒色の腐植土に角礫が混在する埋土である。遺構の深度は様々だが１ｍを超



第 15 図　確認された土坑配置図

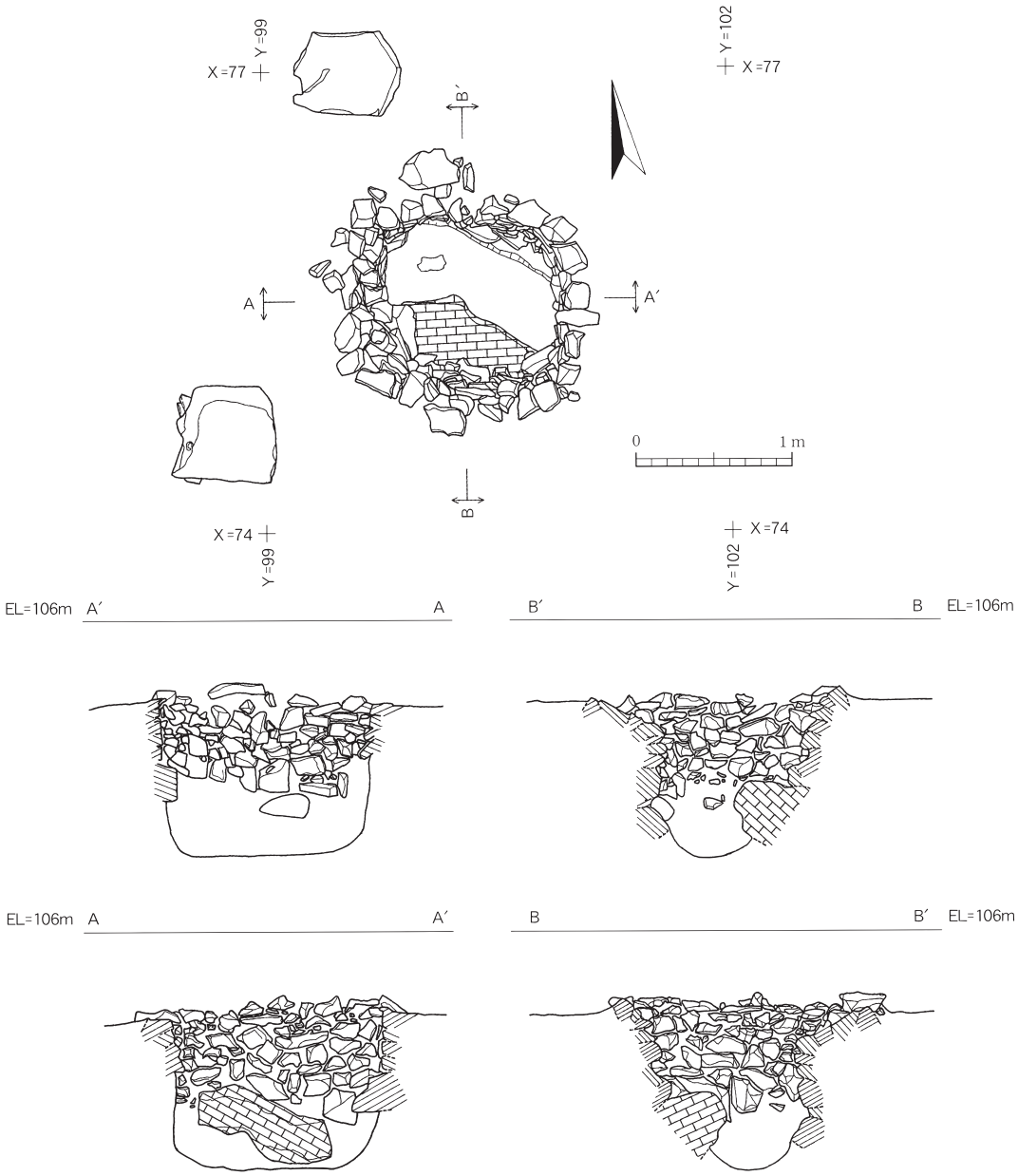
えるものもある。第10･12号土坑は下部に第Ⅵ層を約1.5×2m程掘込む（b）土坑が確認された。

出土遺物には、先に紹介した第2号土坑一括の様な状況は第3～13号土坑には無い、いずれも自然遺物と人工遺物（中国陶磁器・タイ産陶磁器・鉄製品など）が検出される。現状から生活に伴う廃棄物を捨てたゴミ捨て穴的な機能をもっていたと考えられる。

図番 PL.	土　坑　名	地区	埋土	深度	検出層位	出土遺物	備　　考
第17図 PL.27 PL.28	円形石組み遺構 （第1号土坑）	C－3		約1.5m 上部は 石組み		清代青花	第Ⅳ期遺構
第11図 PL.23	第2号土坑	C－1				青磁碗6個 青磁皿1個	第Ⅱ期遺構
－ PL.29	第3号土坑	D－1	貝殻多 炭化物	約 35cm	Ⅱ層貝集 中部下面	褐釉壺	
－ －	第4号土坑	D－3	拳大の 礫		Ⅱ10－20	元・明代青花、細 蓮弁文碗	第Ⅱ期遺構を切る生活物廃棄坑？
－ －	第5号土坑	E－1	黒色土	約 100cm	Ⅲ－Ⅵ	ヤリガンナ、鋏状 鉄製品、青花碗	
－ －	第6号土坑	E－1	黒色土	約 105cm	Ⅲ－Ⅵ	明代青磁・青花・ 自然遺物	
－ －	第7号土坑	D－1					第Ⅲ・Ⅳ期
－ －	第8号土坑	E－1 F－1	黒色土	約 75cm	Ⅱ－Ⅸ	鎬蓮弁文皿・自然 遺物（貝類アラス ジケマンガイ他）	
－ －	第9号土坑	F－1	黒色土				
－ －	第10号土坑	B－1	黒色土	約 125cm	Ⅲ－Ⅵ	中国陶磁器、自然 遺物（獣骨、魚骨、 貝類）	生活物廃棄坑？
－ －	第10号b土坑	〃	〃	約 155cm			生活物廃棄坑？
－ －	第11号土坑	C－1	黒色土 角礫	約 95cm	Ⅱ下	中国陶磁器、自然 遺物（獣骨、魚骨、 貝類）	生活物廃棄坑？
－ －	第12号土坑	B－1	黒色土 角礫	約 65cm	Ⅱ－Ⅵ	中国陶磁器、自然 遺物	
－ －	第13号土坑	B－1		約 105cm	Ⅱ－Ⅵ	中国陶磁器、自然 遺物	

第2表　土坑観察表

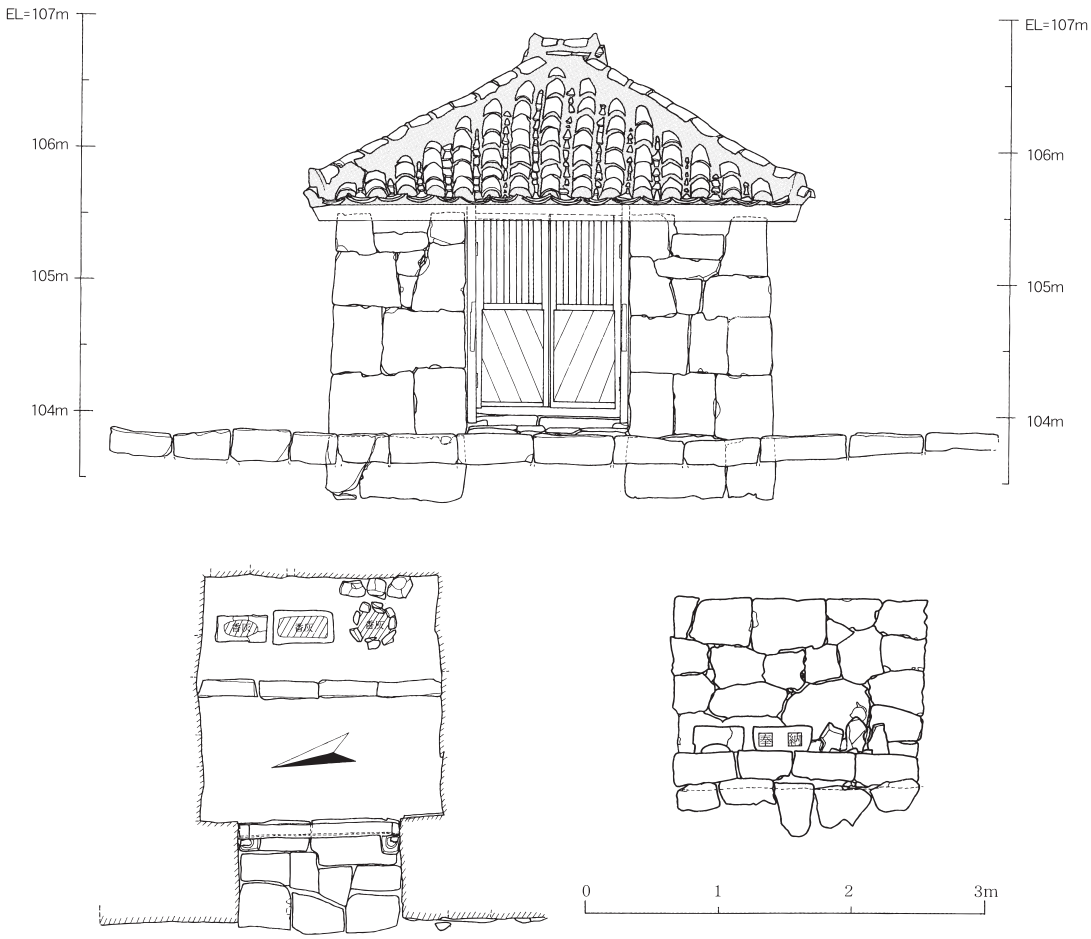
第 16 図　第Ⅳ期　遺構平面図



第 17 図　円形石組み遺構（第 1 号土坑）詳細図

第Ⅴ期の遺構（第 18 図）（ＰＬ.32・33・34）

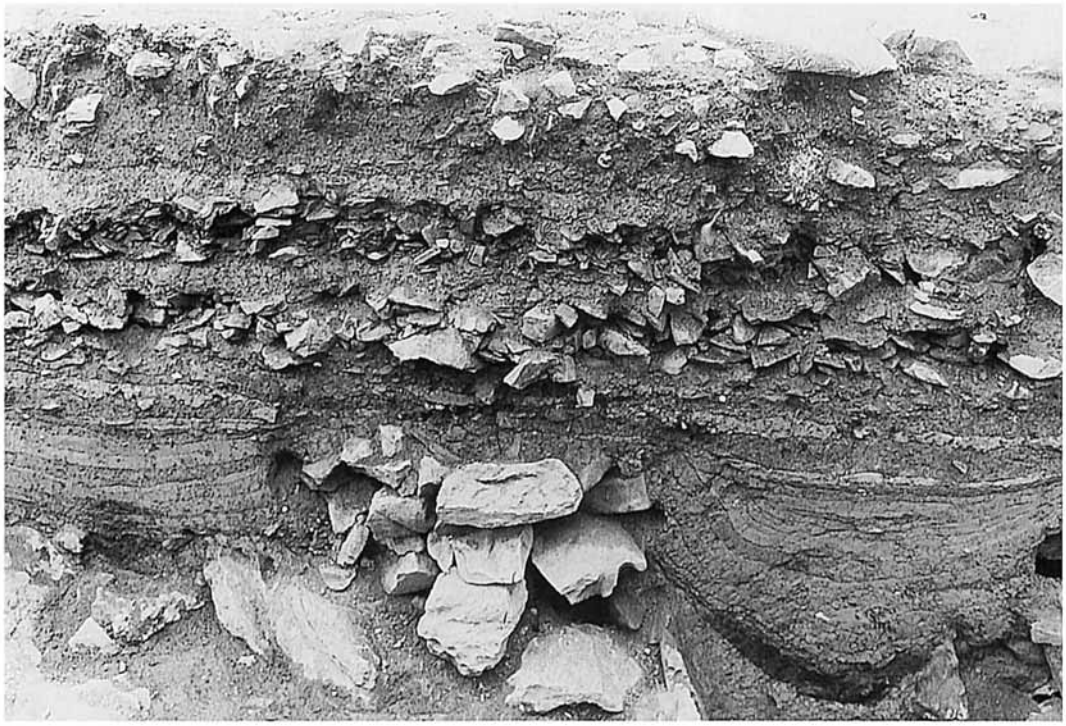
監守が城下へ移り住む 1665 年以後今帰仁城は実質的には廃城した状態にあり生活痕跡のない時代である。これ以降の時期に「火の神祠」（第 18 図）、「石灯籠」が設置、「山北今帰仁城監守来歴碑記」が建立（1749 年）される、火の神祠の設置年については不明だが 18 世紀には『琉球国由来記』（1731 年）に「今帰仁里主所火神」、具志川家家譜の『今帰仁城旧城図』（1742 年）に「火神」が図示される所を見ると 1609 年の焼き討ちから 18 世紀の間に設置されたと推測される。現在の火の神祠は整備により移設され元位置から東側に設置される（第１図・ＰＬ．1）。



第 18 図　火の神祠詳細図

ＰＬ.８　発掘調査区全景（北から南）

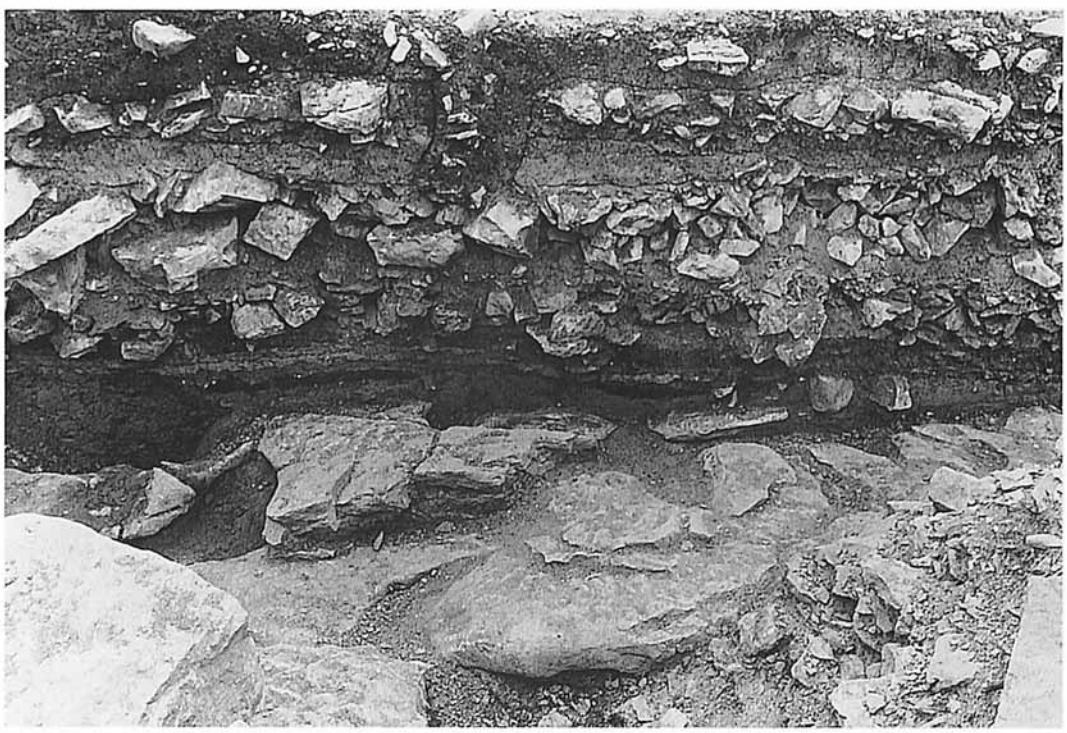
ＰＬ.９　南北トレンチと石敷き遺構（第Ⅳ期）及び火の神祠（第Ⅴ期）（南東から北西）



ＰＬ．10　東西トレンチ土層断面西側

ＰＬ．11　東西トレンチ土層断面東側

ＰＬ．12　南北トレンチ土層断面（南側）



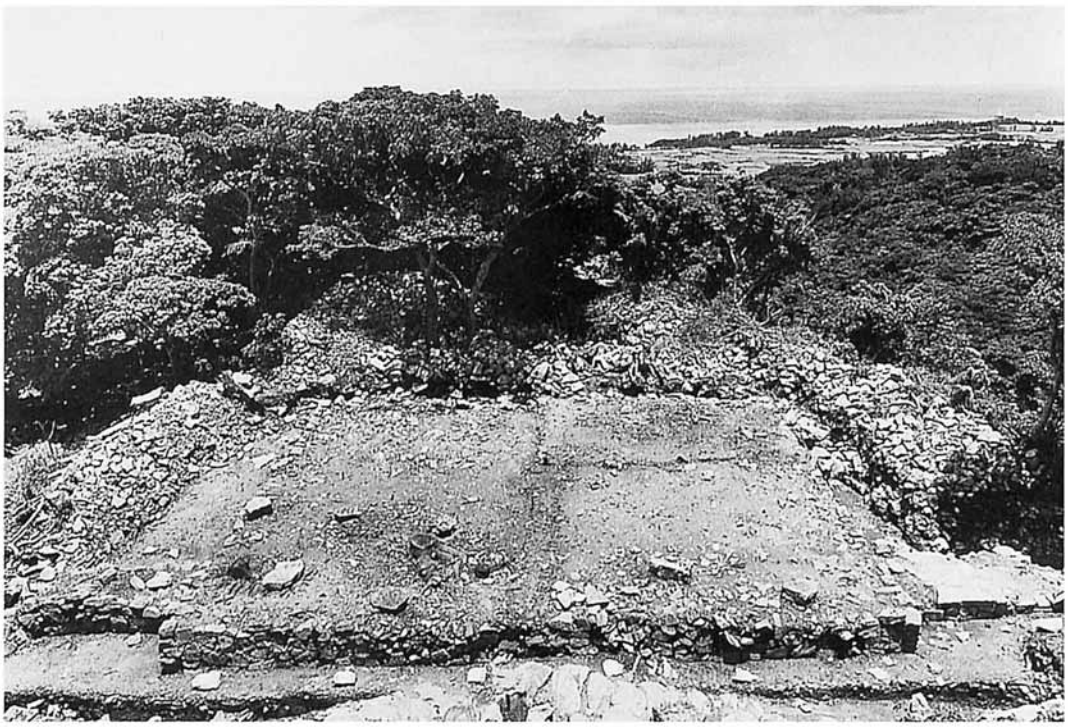
ＰＬ．13　南北トレンチ土層断面（南側）

ＰＬ．14　基壇東側の造成層及び柵列跡（第Ｉ期）

ＰＬ．15　Ｂ－１トレンチ北壁土層及び土留め石積み（第Ｉ期）

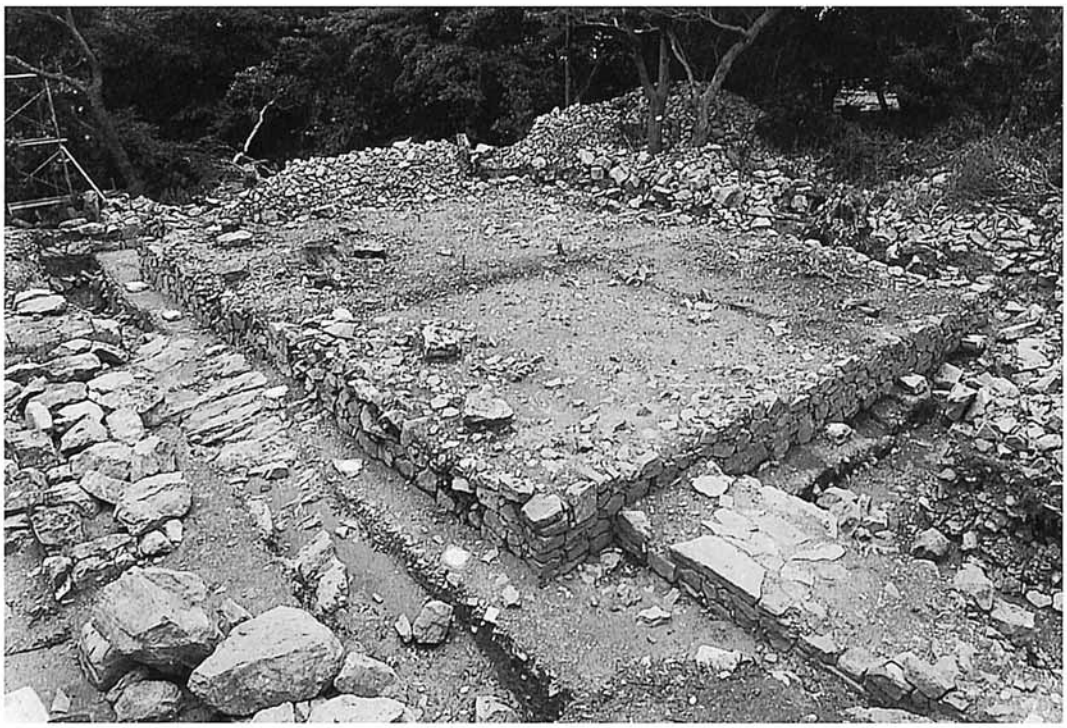
ＰＬ．16　柵列跡（第Ⅰ期）

ＰＬ．17　北側に並ぶ不明土坑（第Ⅰ期）



ＰＬ．18　翼廊付基壇建物跡（第Ⅱ期）（南から北）

ＰＬ．19　翼廊付基壇建物跡（第Ⅱ期）（南西から北東）



ＰＬ.20　翼廊付基壇建物跡（第Ⅱ期）（南東から北西）

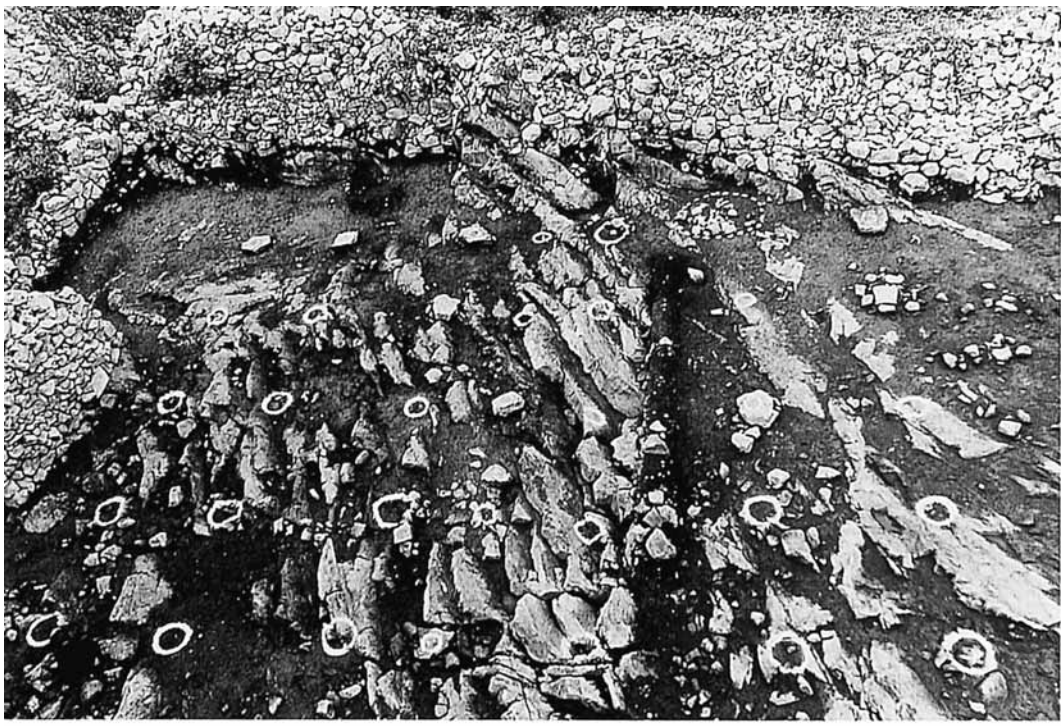
ＰＬ.21　石敷遺構（第Ⅲ期もしくは第Ⅳ期）（南から北）

ＰＬ.22　方形石組み遺構（第Ⅱ期）

ＰＬ.23　第２号土坑（第Ⅱ期）

ＰＬ.24　南門（第Ⅱ期）（南から北）

ＰＬ.25　石積み近影（第Ⅱ期）（東側城壁内壁側）



ＰＬ.26　礎石建物跡（第Ⅲ期）と南側城壁（第Ⅱ期）（北から南）

ＰＬ.27　階段遺構（第Ⅲ・Ⅳ期）

ＰＬ.28　礎石（第Ⅳ期）と石敷（第Ⅰ期）

ＰＬ.29　円形石組み遺構と礎石建物跡（第Ⅳ期）（南から北）

ＰＬ.30　円形石組み遺構近影（第Ⅳ期）

ＰＬ.31　第３号土坑

ＰＬ.32　火の神祠（第Ⅴ期）調査前

ＰＬ.33-1　山北今帰仁城監守来歴碑記

ＰＬ.33-2　主郭（俗称本丸）で行われる祭祀
（1982年９月撮影）